紀伊國名所圖會

後編　一之巻

若山補遺

839
M 6
80

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

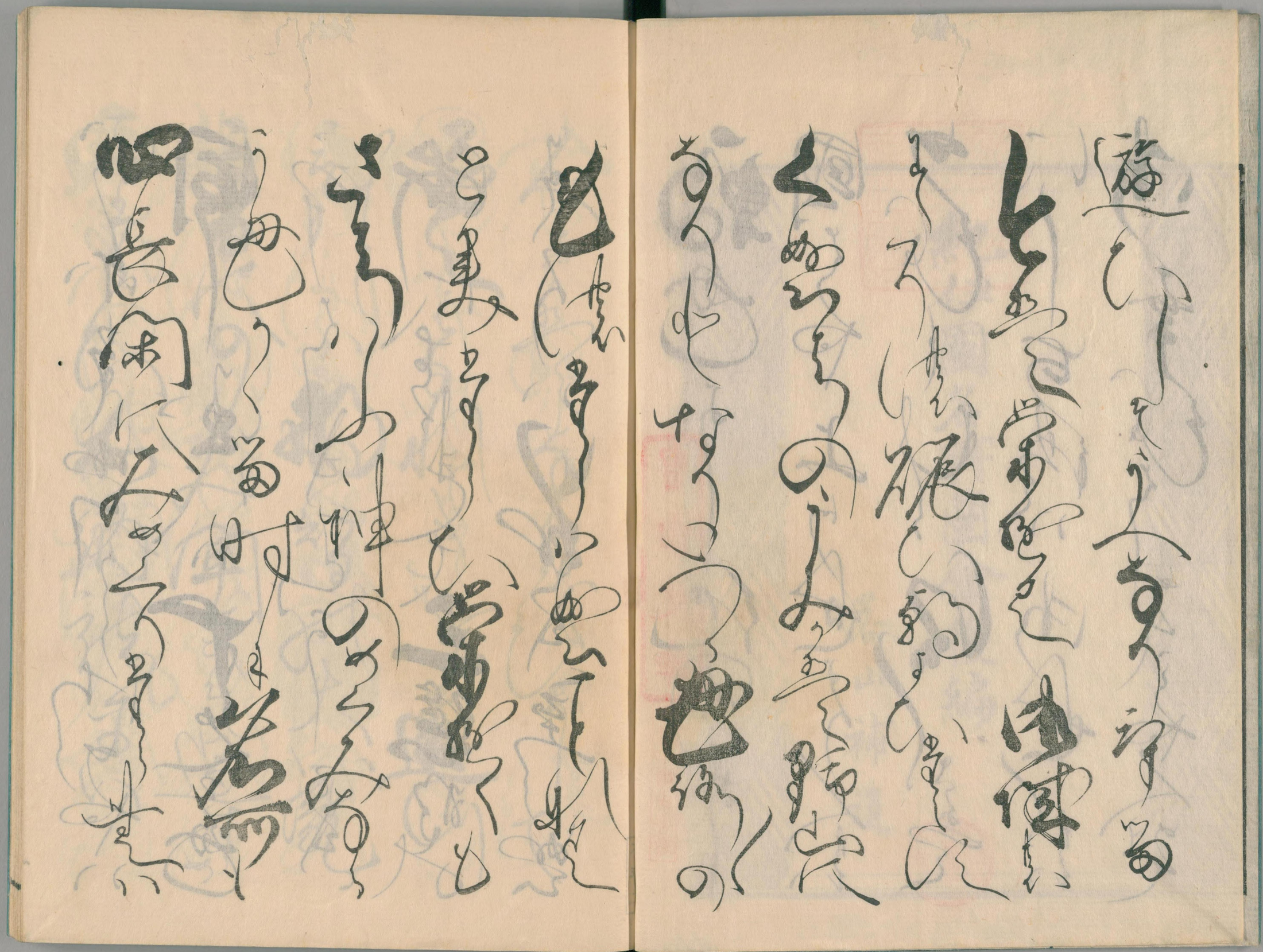
ガラス使用

紀伊國名所圖會後編

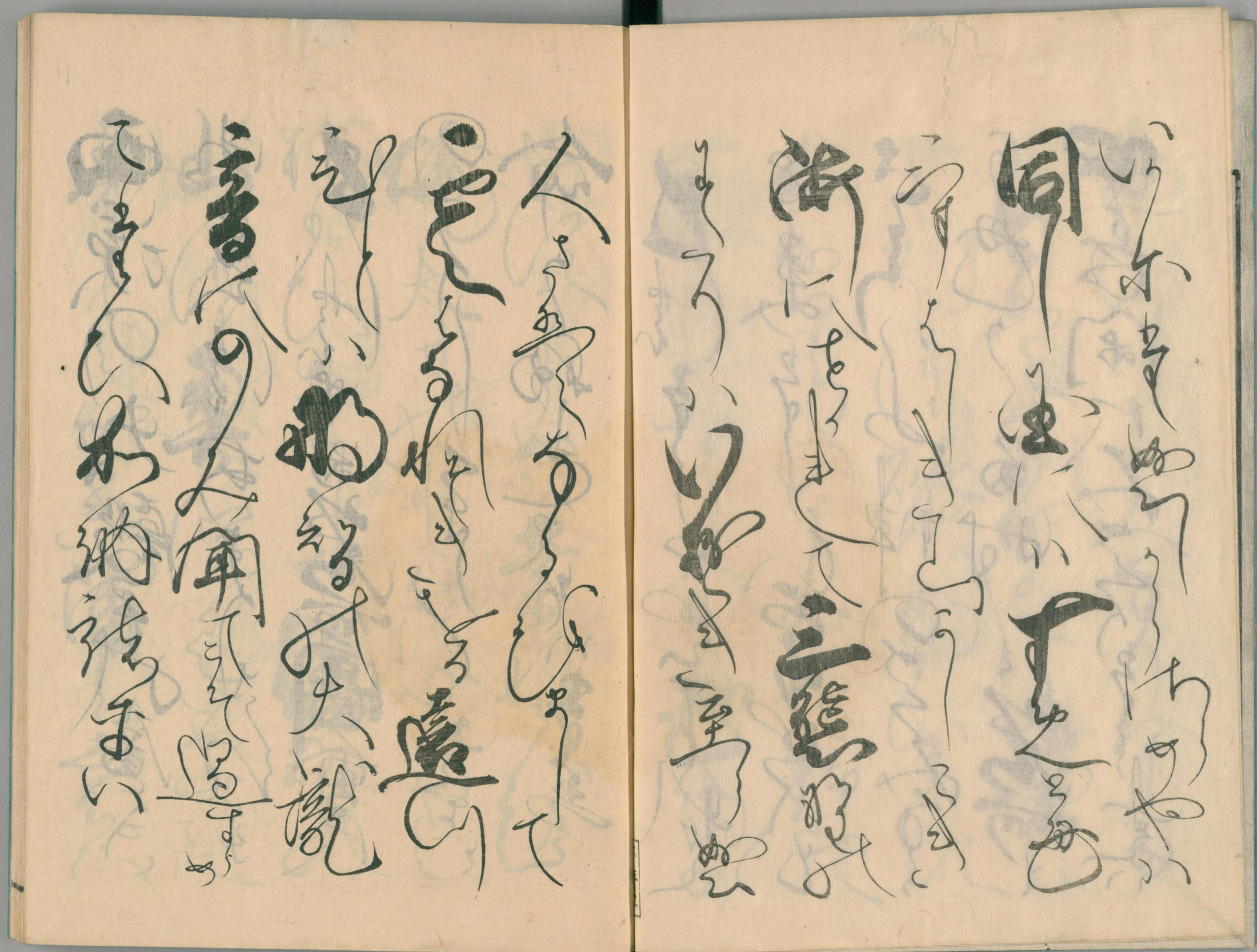
若山補遺

曽山文庫
根岸信輔氏寄贈

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用



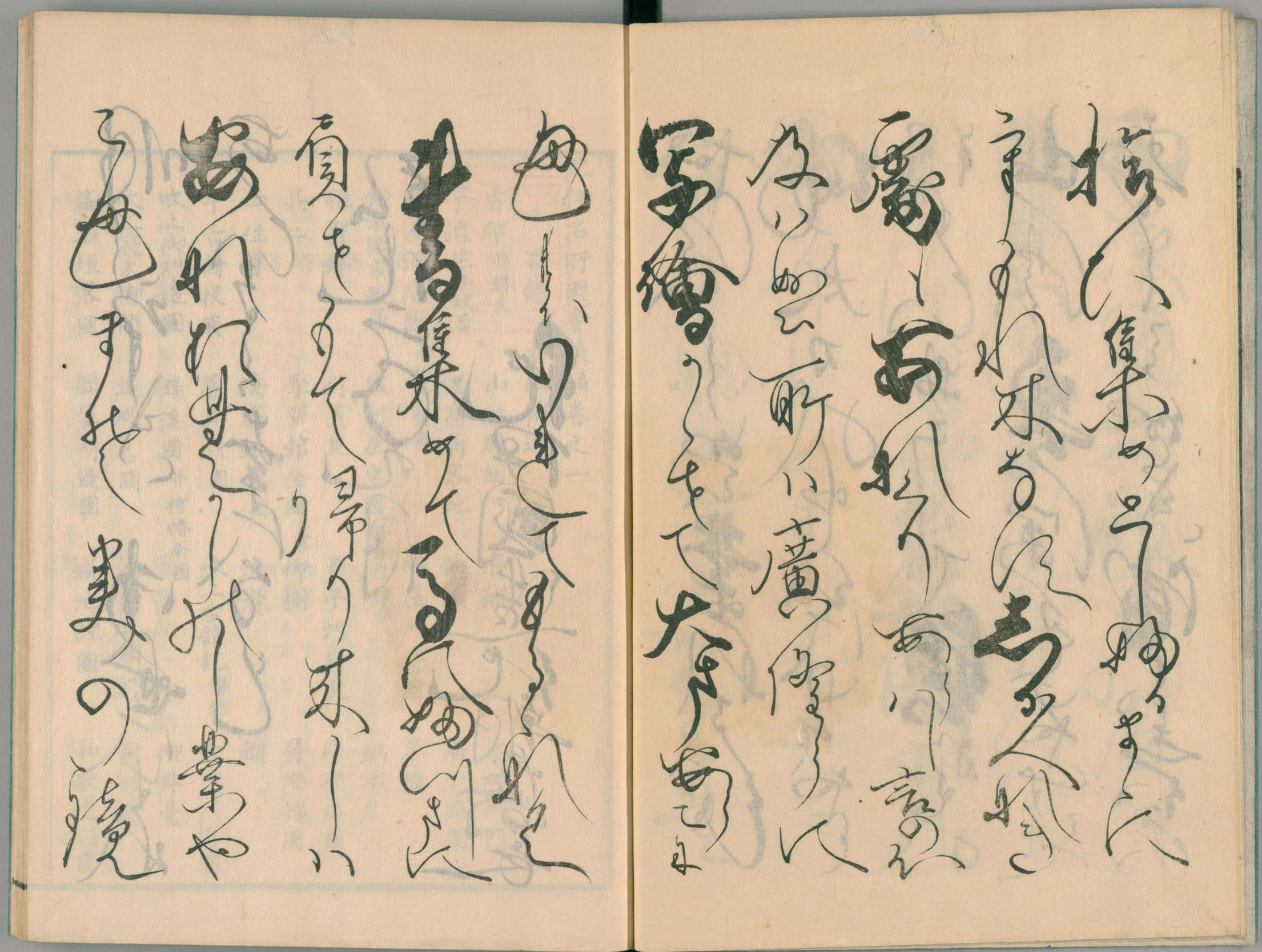
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

西涙の大殿長廣さ
はれ長はしあるかさはれ
日
若山笛
のこうしをとをとを
命うはまるそいまを

如くなる豊臣
傳太刀
はれかして能
山
東
深そやすた
新こうなる
浦

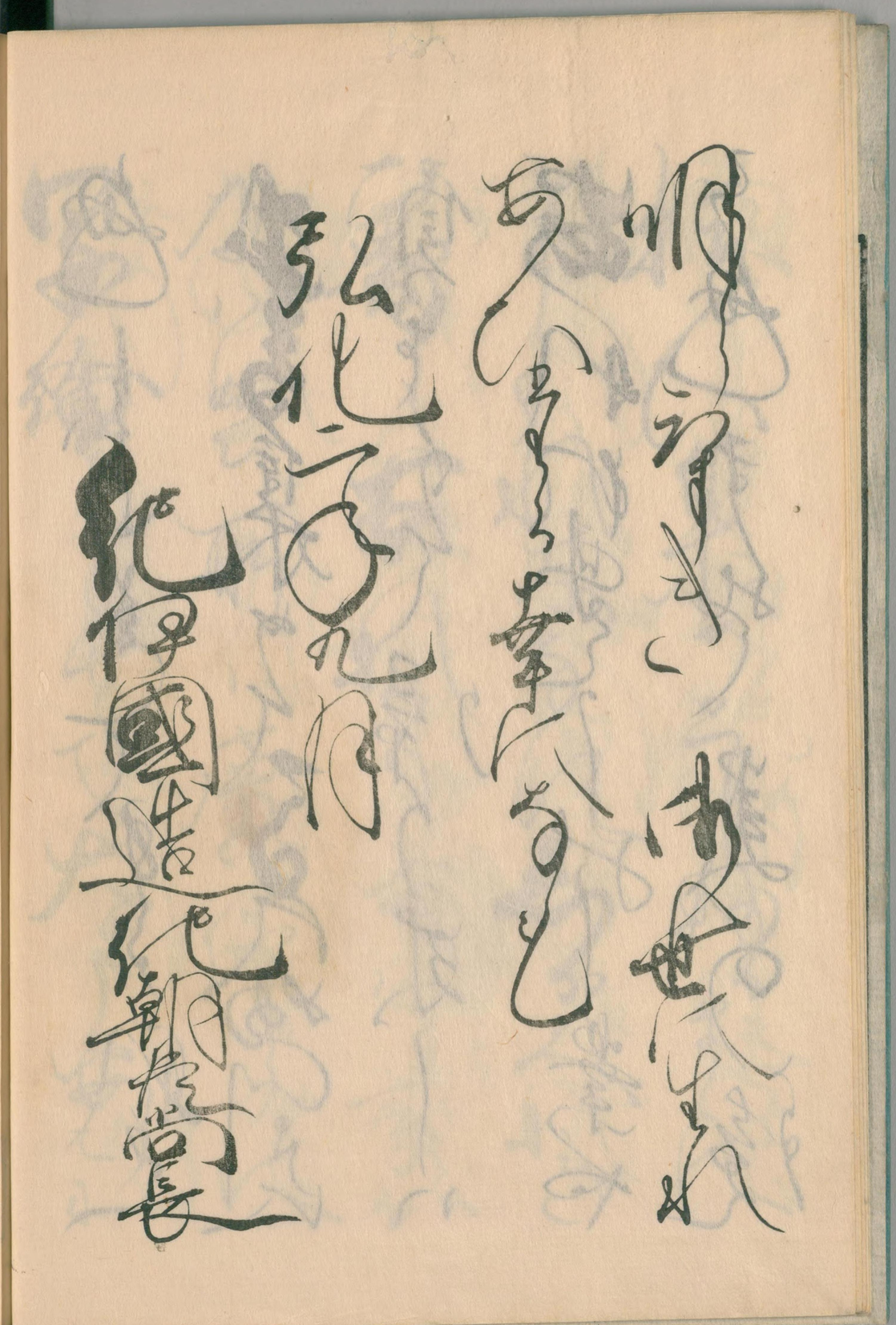


国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

紀伊名所圖會後編卷之一

目錄

若山補遺　府城　本町御門
山口驛圖　粕漬　廣小路圖
古印 并解文　納屋河岸圖　京橋
惺窩翁客地　鍛冶戸
宇治宅子故居
新屋酒店圖 并粕漬製圖　同夜店圖
鈴木孫市故居　駿河屋店圖 并本字饅頭　昌平河岸文
雜賀鉢　釘貫里　醫學館圖
其十　學習館全圖 并柳樹　鰡
正住寺　漁者
牛舌餅投圖　簾貝 并圖　吹上古館記 櫻樹　大手御門邉圖
吹上御門邉圖　鶴溪圖 并檜椿全圖　御舞臺
吹上冠木御門　扇の芝圖 并文　堂形圖
高石垣畧圖　追廻一口圖　岡口御門邉圖　城池鯉圖　和歌道 并圖



無量光寺　車坂稲荷社　并圖
日前宮除夜詣圖　并說　土井呉服店圖　淺草文庫
田中蜜桝市并圖　熊野路一里塚　呉五官肖像

紀伊國印

此印天平二年本國の解文に押せり三編の卷首に載せる仁壽四年の國印よりはやゝ古く印中の文字も異なれば更に模寫せりしに其解の逸文も因に下ふ載せて古の制度を考へんき一端とす本書は東大寺の勅封庫にあるとぞ

紀伊國司解　申天平二年收納大稅并神稅事
合七郡天平元年定大稅稻穀肆萬陸阡貳佰　捌拾漆解貳斗叁升伍合
不動貳萬陸仟貳拾壹解玖斗玖升漆合捌夕
動貳萬貳伯陸拾陸解貳斗叁升漆合貳夕
粟穀叁拾解伍升
穎稻漆萬捌阡壹伯肆拾捌束壹把陸夕
爲穀古穎漆阡玖伯伍拾束
得穀漆陌玖拾伍解
振解量入漆拾貳解貳斗漆升貳合陸夕
之漆伯貳拾貳解漆斗貳升漆合肆夕
出舉壹萬陸阡壹伯捌拾束

身死壹伯叁人免税叁阡壹拾陸束

定納本壹萬叁阡壹伯陸拾肆束

利陸阡伍伯捌拾貳束

古類伍萬肆阡壹拾捌束壹把陸分

合漆萬叁阡漆伯陸拾肆束壹把陸分

雜用捌阡陸拾束

年新白米叁伯漆拾壹斛肆斗新漆阡肆伯貳拾捌束

酒米貳拾捌斛陸斗新伍伯漆拾貳束

年新外交易進上小麦陸斛　直陸拾束一斛別一十束

遺陸萬伍阡漆伯肆束壹把陸分

輸田租稲穀肆拾斛玖斗玖升漆合

全給貳所封主貳伯叁拾壹斛叁斗貳升壹合

貳分〻壹主給玖拾玖斛壹斗伍合伍夕

納官玖拾玖斛壹斗伍合伍夕

納公叁阡漆伯壹拾斛伍斗漆升伍夕

振斛量入叁伯叁拾漆斛叁斗貳升肆合貳夕

定叁阡叁伯漆拾叁斛貳斗肆升陸合叁夕

依民部省天平二年八月廿八日荷加添軽税錢直稲叁阡

漆伯貳拾肆束漆把

都合見定稲穀肆萬玖阡叁伯捌拾叁斛貳斗捌合漆夕

不動貳萬伍阡貳拾壹斛玖斗玖升漆合捌夕

動貳萬肆阡叁伯陸拾壹斛貳斗壹升玖夕

粟穀叁拾斛伍升

類稲陸萬玖阡肆伯貳拾捌束捌把陸分

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

清伍斛陸斗　清四斛　渾一斛六斗

正倉玖拾間　空七間　借納郡稲一十一間　借納公用稲一間　借納義倉粟二間
借納官奴婢食料稲四間

穀倉肆拾間　不動一十九間　動廿一間

粟穀倉壹間

類倉貳拾肆間

鑑壹拾伍匂　不動六匂　動九匂

軍團糒
[illegible]
天平元年定糒壹伯玖拾壹斛捌斗貳升壹合

以下畧

志那代の昔より
あらそへて無乃おくも
わすれ草かな

加納諸平

齋部宿禰孝秀書

山口驛より遥に
御城を望む圖

家集
天和二年の冬
將軍家の御使の所迎ふ
山口といふ所にて田家
にやどりをるに庭の木
ずえより月をみて
一夜の夢田中の庵の
さびしきを
なぐさむ
床は月のとまるなり
源朝臣令綱

萩園家集
山口峠にて
雄の山は
此木の間に
東のや
遠の朝廷は
とゝ沉御まもる
夏目甕麿

幾樹青松夾路堆
遥看城堞樹間開
沙川溶溶人呼渡
此水知從芳野來
賴山陽

紀伊國名所圖會後編卷之一

若山部補遺

府城

若山は中央小天守そびえて樓閣うるはしく那賀日の曜き三層四層の殿造利麗にやうやうしく大城のうをを紀伊と伊勢との二國を覆ひ四面は内廓八八重垣をめぐり岡山南すはらおひて年経る松の木立蓊鬱しく或は龍の蟠れるごとく或は虎の踞まるごとし木川とはるかに東より流き小一流りて傍文機の帯と見へ長峯北山は新面に巻なすを背面に列ねて遠き沖楫と仕奉り那賀名草の田面千代八千代を一目に見渡されく竈の煙賑し古昔羽柴氏が築しを洛陽氏のはを移して元和の以降更に内外の廓いと厳にて倚りて城隍は水常に湛へ茅世に易ふ紀鎮と為れハ

誰ぞ仰き尊さ給ふ

（法所遺藁）

九月八日陪前法親王於紀州城樓　那波道圓

風近重陽和且柔青雲高客上城樓南州海嶽隨看

在自是應名多景樓

扈從上城樓　菊地衝岳

宗室藩封跨二州三層突聳鎮城樓勢南表裏山河

色紀水迢遥海嶽秋天險寧論呉子對雄風欲賦楚

王遊追隨遠指　高陵樹瑞靄氤氳繞玉洲

次友人夏夜當直城樓之韻　竹村荻渚

雨餘草色夏陰収此夜偶攀天半樓月掛嶺頭蟾影

動雲晴林上桂香浮清風吹樹偏忘暑白露横江忽

占秋窓對葛城情自逸戸含紀水望愈悠柳堤登歩

去来客蒹渚留連遠近舟世上塵喧堪可謝人間富

貴復何求習家酔飲尋豪趣河朔凉筵結雅遊不識

誰家絃管起依稀使我在瀛州

奉謁紀侯謹賦拙詩一章

宗藩治國海南濱奕世恩光澤洽民況有遺文常社

席進修秘識逐年新　伊藤善詔

殿の御前まさもらふく古語拾遺をよろこび申をふり
日前大神のおらぐ所をよみもをるかいともく
うこけまとおれつくたまわるか　本居宣長
朝ちう紀の大神は國幣大殿の名八大神の神代は道をね
もろろよ尋給ふと其御書あれらは給ふ御心はあやう
まき大神をめてのきまもり殺はもち日のち護よ常とハ
よまをも給をを大神しを賞はの守護よのまもも日はまもり
ち為をを守給をく國しら天御稜威の光四面八面よ
いよくまもく照給ひしやき給ひ萬世まいや幸長よ慶
ひやしさの天ひ面ふ殿の御世をや

本町御門　府下の入口なり御門より内を本町といふ元和年中京橋御門のわよ通衢を開きて本町とす

庚寅元日　南紀作　那波木菴

新年何所好　白日已徐長酒宿北京客梅飄南國香

江山催淑氣氷雪逼青陽莫謂非吾土委身是故鄉
元日の新世のいとひこして大平の我よ茶をもくひて
君ら年を免名をおふさのあをくもしられしき千世
のくにのうたとよろこびきて我もまたうたふ　本居宣長

宇治　本町の東にあるを東宇治
西にあるを西宇治とす

くもより今年をちよりは初ちかと名も若山は里のわか水

宇治の名日本紀に紀直祖免道彦雲異記小宇治大伴連ホ
の名皆此地名より出て上古ハ此邊の總名なりしを後世分
れて鷺森七日市六日市ハ三村となり釘貫德田木四日
市等の小名ハ中ごろの室町家に佐武伊賀守と云人あり其父を元昌といふ
賜ふ慶長ハ為宇治村鷺森村と二村となり其後
府下小屬しく二村ハ地を割て内町を商戸とし宇治を
士邸とし
日本靈異記云
大花上大部屋栖野古連公者紀伊國名草郡宇治

大伴連公先祖也天年澄情尊重三寶案本記曰敏
達天皇代和泉國海中有樂器之音聲如笛箏琴箜
篌等聲或如雷振動晝鳴夜耀指東而流大部屋栖
古連公聞奏天皇嘿然不信更奏皇后聞之詔連公
曰汝往看之奉詔往看實如聞有當霹靂之楠矣還
上奏之 以下畧之

節婦宅子故居 其地今詳ならざれども守治大伴氏の因を載せ三代實錄云 貞觀六年八月十三日節婦紀伊國名草郡
大伴連宅子叙位二階免戶内田租表其門閭以旗貞節

惺窩先生客居地 今詳ならざれども本國の事跡傳ふる事借むべし 文集行狀云 慶長十一年先生赴南紀蓋太守淺野幸長
招之也其所待尤謹弱浦有菅神廟太守請先生誌
其碑銘又為太守抄經書要語三十件許添倭字之

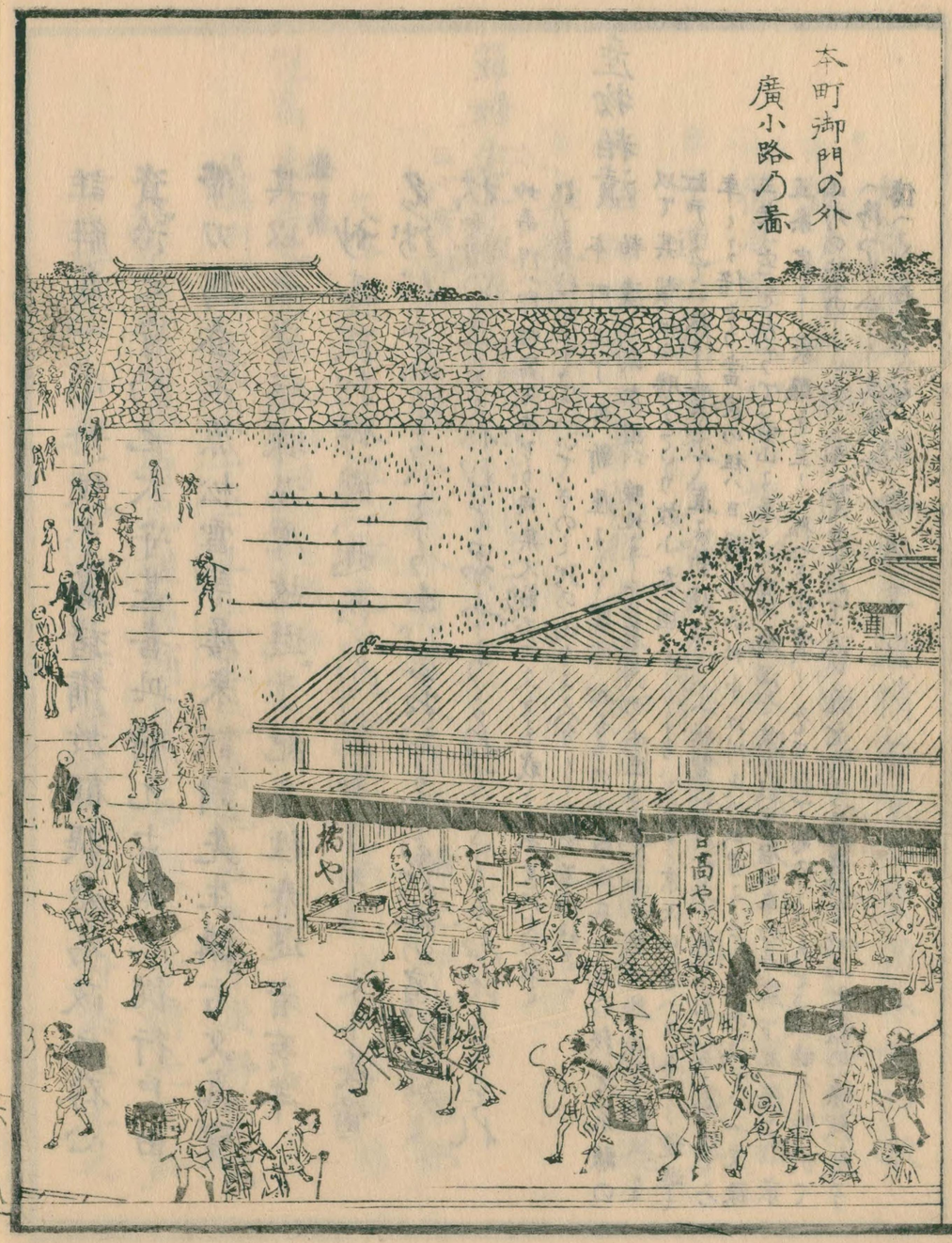
註解為一小冊便于寅緒備於顧諟是為政之存心
資治之守約也太守甚喜此時元古栢允從行戶田
帶刀為春永原松雪等屢來訊請先生講古文真寶
其以太守盼睞渥厚故遊于紀冬往春還者有年

妙壽院 紀伊國の趣 木下長嘯 妙壽院八即惺窩先生なり同集又餞ぶの文をも載せ今畧して文の末を
都もゆくさきのハいてさのミちの関ちよ人なくめ歌等の歌あり

秋霧の立ちそめしより思ふ人なくめ歌等の歌あり

産物粕漬 本町五丁目新屋すく製す初めの小西瓜茄子瓜の類を家釀の粕漬とて本國ハ曖地すして菜蔬の生立もよくもく惣て絶品を撰ふを以て其製他小勝もすくれ故小本國ハさくもいと多し京大坂等へ日毎に運送し江戸にて珠に賞して直を新屋漬といふ此製いつれ比より專ら行れるや近ころ年々倍々當家の祖八日前宮の社中江川氏の四男にして紀秀淳といふ文祿三年宅を分ちて若山に居し世く造酒を業とし宝暦四年の冬府下其侯より京五条家に家釀を呈し弦つる小貴し山川の菜のしる氷いゆれそなれて人の老をやく長寿といふ古歌の懐紙をうけ給ひ今に其製を傳へて名品とす

本町御門の外
廣小路の畫



辛夾元日
一任年々白髮新
傍花隨柳養吾真
南州民物百應喜
和暖先占天下春
李立卓

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

本町五丁目
新屋酒店

重陽の日朝まだき
より新酒をひさぐ
羣集おびゝゝし
江戸豊島屋にて
上巳に白酒をうる
に似たり

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

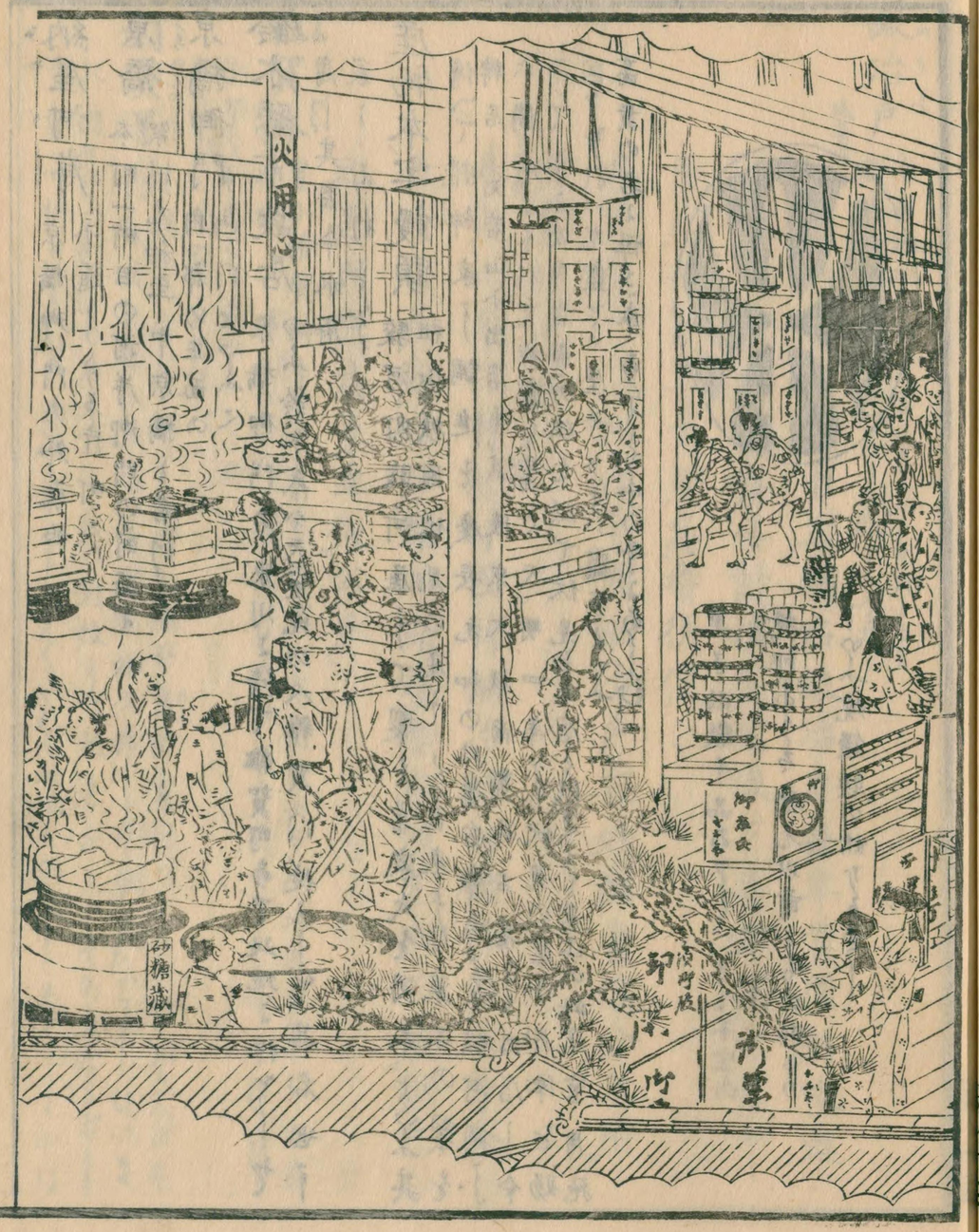
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

京橋御門の外
納屋河岸
あらち
の図

納屋河岸八丁目より
五町目まで
毎朝米市
あるとて
賑し

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

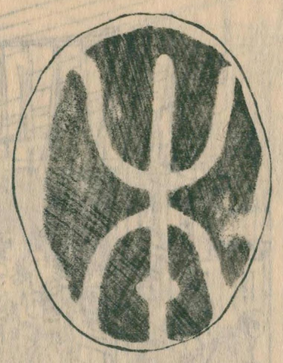
納屋河岸 京橋御門の外東西小通りなる片町に

京橋 本町一町目の河岸御門の前面に架し元和年中京橋と名ける

京橋御門 内郭の正面の御門をいふ

鈴木孫市故居 京橋御門の東川に傍て雑賀町あり此地に住せし鈴木氏は天正比の人雑賀門徒にして其名世に高し其裔今水府家にあり

産物本字饅頭 駿河町駿河屋にて製す當家氏は固本といふ其祖山城国伏見の産にして古来より菓子の製を傳へて搢紳家に調進す慶長元和の比屢台命ありて駿河国に轉居し又若山小出店も其後京大坂南都名古屋にも出店し今六箇所に分れて同製を鬻ぐ天明四年より伏見の店小肝俸を賜ひて今に及ぶ台命の故を以て伏見を本店とせしも若山の此店官用絶間なきれば尤盛なり屋号もまた霸屋といふ高貴の名に憚る事あるにより今の号にあらむ



菓子形数千品あるといへども本字の焼印あるは慶元以前よりの形なり

とかくいふ焼饅頭の始なるべし

鍛冶戸 本國鍛冶の事古書に見へざるを因まとなす延喜式載せる今東西鍛冶屋町あり各郡にも又多し

鍛冶戸紀伊國十三炬右鍛冶戸毎年當國計帳進官官先下主計寮全計損益然後下寮即従十月一日至二月三十日為番役使凡五畿内畿内紀伊等國鍛冶戸百姓調庸傜分者附貢調送之

續日本紀 養老六年三月紀伊國韓鍛冶杭田鎧作名床等合七十一戸雑姓渉雑工而尋要本源元来不預雑戸之邑因除其号並従公戸

雑賀鉢 曽小雑賀鉢といふ海部郡にあり雑賀は本國のうち地名なれど名草郡にもわかれる雑賀荘の内にて制をしるせり今はなし

釘貫里 書にくぬきのさと後の考をすべし 府城の北今内郭とふれる地を舊釘貫村といひしとて天正年中府城を築くに及びて郭外に移し市廛をひらきむいま北町といふ釘貫の名木とこの具の釘拔より起まるべしあらばるべし古書に柵をくぬきといふる事あるにより此地も関塞なるとあるべしやはた

浅野氏の文書
釘貫氏も尺ゆ

昌平河岸

湊の地東の庁町より南北に通ずもとハ湊片原と云ふ文化年中今ハ名小改め文政年中かちく三町とハ外陸小湊へる
庁側寄合橋の詰より干店を建りくれ夜店ありて賑ハし

柿園文集 昌平河岸納涼ハ記

山住の静かなる人く市を離れうらうらあらはれ来る六月の暑さに困しゆふつかたの涼を河岸ハ求めそこに来り此頃を知るも多くなるもおのれんすやゆきうの人遠目も新く立殘て家人下童なる太刀の拵ふらをやふる神を祭れ堅魚なる海士も老法師の袈裟をうを被りてそ走る蟬の羽おいうたる老ハ歌詠のうちハさして拵る八深き窓ハ内に養まこゑるにあらさる色。我ハ頭なる相撲人も暑ハらさわてきをうハあらはるとハ思ふうん おろそかうハ左さまを右さ海に押やられ中く汗出る熱の長。彼方此方に群居て賣ふ種ふハ目うつふ絵れハくゆく川つにうけ渡

ホノ十四

る炉の為新に蛍よりをくるもえるハ中に揺すぬ追風さと業中きて夏痩ふすとい物を思ふ也蓮葉ハ暑飯を世の濁り涼しを夏の花新ふる菓子も粉塵を居べうより糠餅結果を神さび れと絞ぶみうきハ為きうる所を洗川の玉串ハ祓て刀自ら弱肩ハ太る強ふハ掛て丼草ふうもいとむつり。喬麦ハ何時を為それと人の國に勝れる味を誇ハ醴酒を六月七ふハうこと紀御膳に毋添ふとくはすくや。交しも人の好む為菓好ふ誠ふ為一稜さてハ丼鮒真奥ふ所を紀ふとを上の品ふ中下と思ふれる中ふハ海の老ハ若ふハりて躍ハ知るもハ西。價乃さふ為する所なるていとをにくハ紀幸多ふハ大ふふを足も十文字ふ分まど ふを儲ふを動きふく立とくされる一ハれふふく知ふこ思いを ふ一ハ海ふをれい強て行也ふを敢樂男ふ世ハ空ふふハして 菓子鬻ふ人をふ又何幸をふとわかさんとて。まぐいふを鶏

了行すべし。川遡して行くこと幾ばくか。棹を新なる舟に移して後ふものの者の形やあれ。漁とも猟とも知らぬ風色を以て雲を以て教なすこと。高く行くに任せ。八角の楼閣の神樂あり。オの男と女と。絵あるいみしきものの出でたるの形と。彩のこと。絵おもしろく行くよさ。行くてまた河原をこうし出でたるもの。殿を造りそなへて。百機の高くもあるとしあれば。婢女かも唐錦を裝ひ。流の離るるに。金銀枝と白銀の花咲きつく。又新たなる所より行くこと。彦星とたがめ。はたもあるべきなれば。くるぶる千歳もまもなく行くをいうあれと。此家居まれ家意しくのみ。故をきして。一向よろこばれていい。怪と打傾きつく。彼方を又行れば。第星逆ることきと。餘しくいふ。行のハをうらうらけらんいてさハ我も長居をゞとて退く

橋に柳千すもれるハ星ゆる天文博士句詩誦ぜ。文章生或ハ呉竹ながら紅をいれ芳野河を引く恨あるも多うめと水に風漕ぎ行くなる小舟に隙よ来通して月もやゝ更ぬれと

學院乃柳の蔭を牧晴う花頃須

柳樹 正徳年中國校を建し時岩橋景淳館内に植るの数年をへて繁茂を詳に風雅集に見えたり其後数年を歴て館の外ようにし益繁茂ぬ

詠學館柳 五首

岩橋景淳

不映歌楼上手移講館旁託根能得所一段發春光

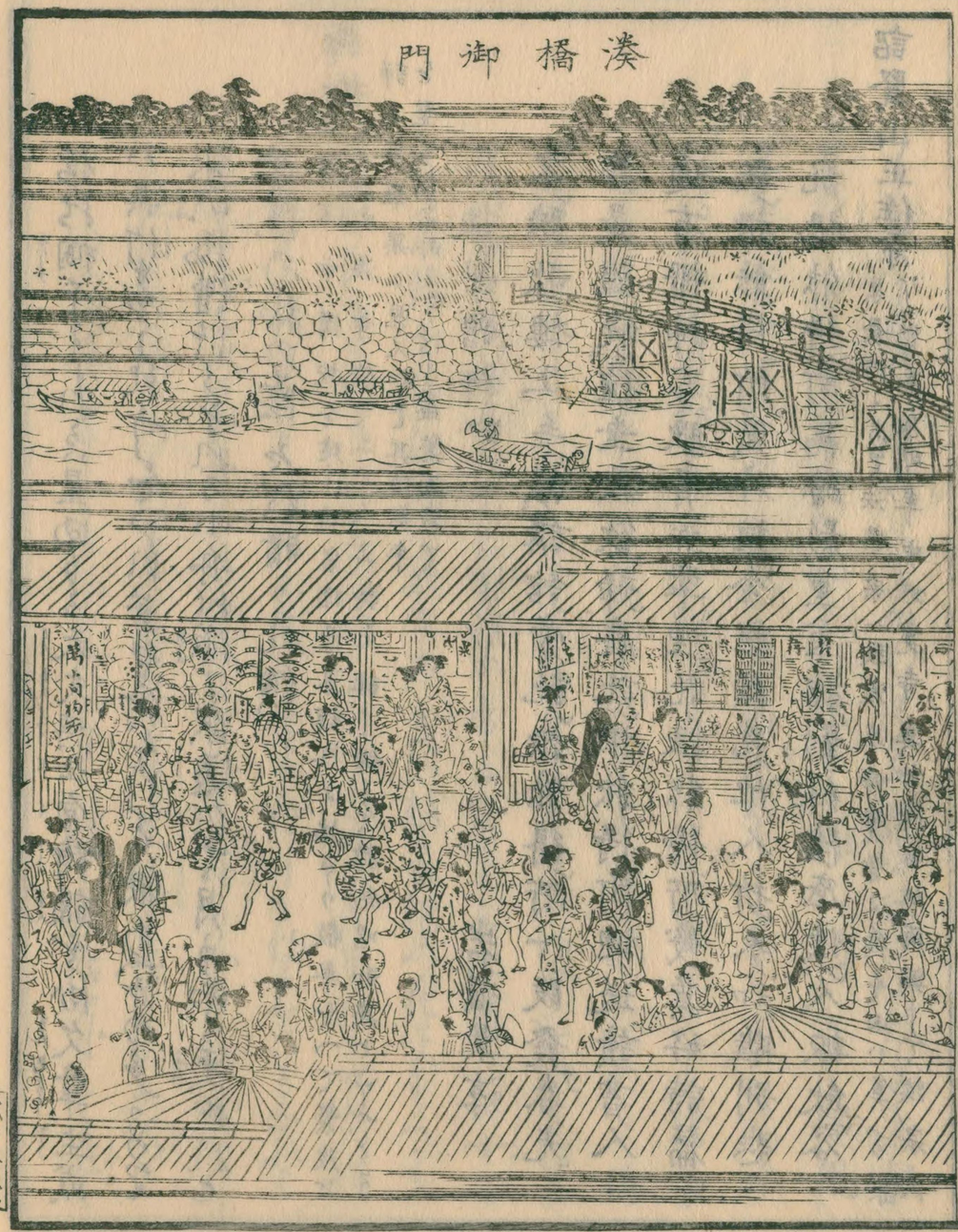
非是隨堤種垂枝欲掃塵託根能得所迎送讀書人

適有搢紳客眼青弄翠煙託根能得所幾費好詩篇

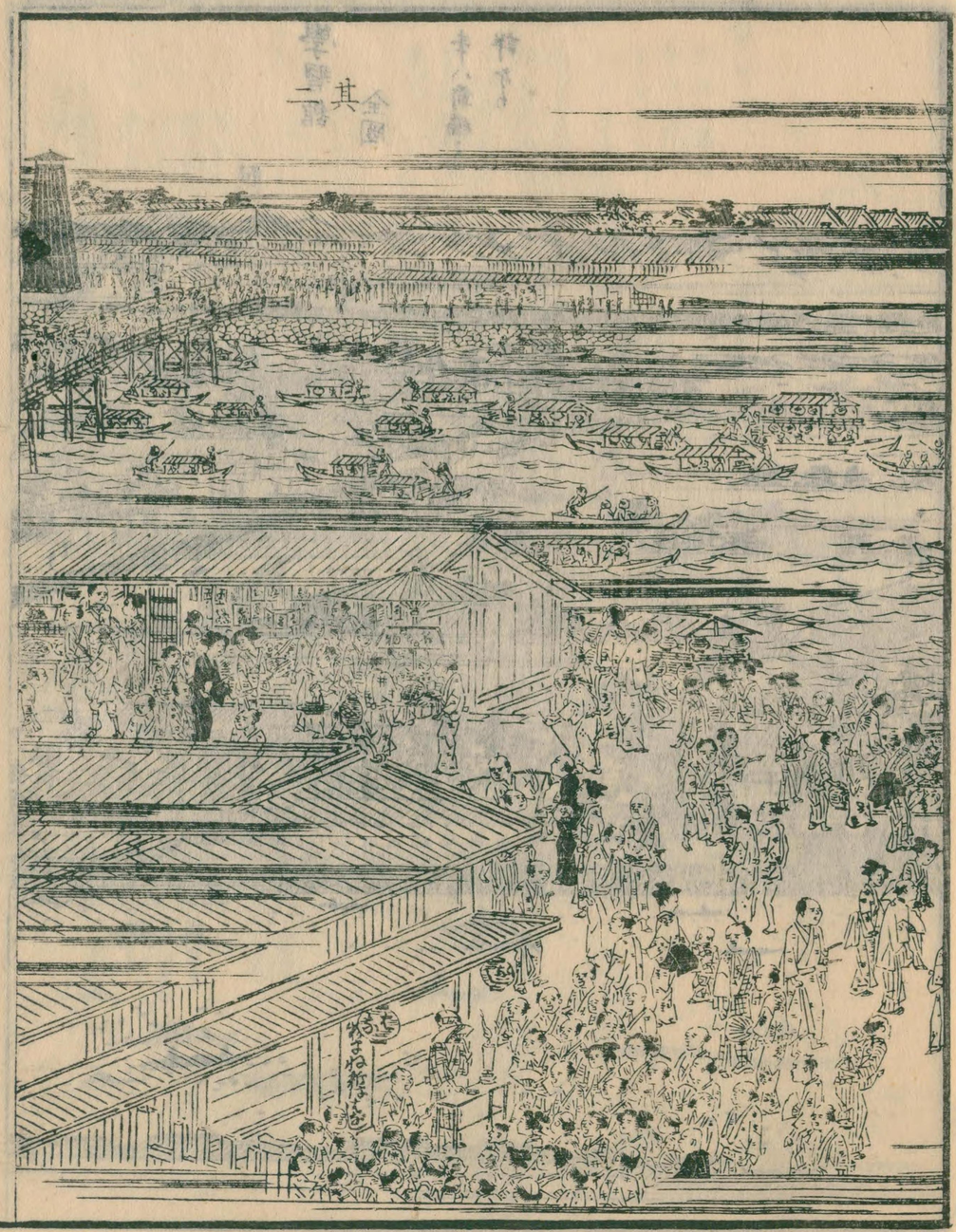
託根能得所風外捲金絲頼免他人折未知離別悲

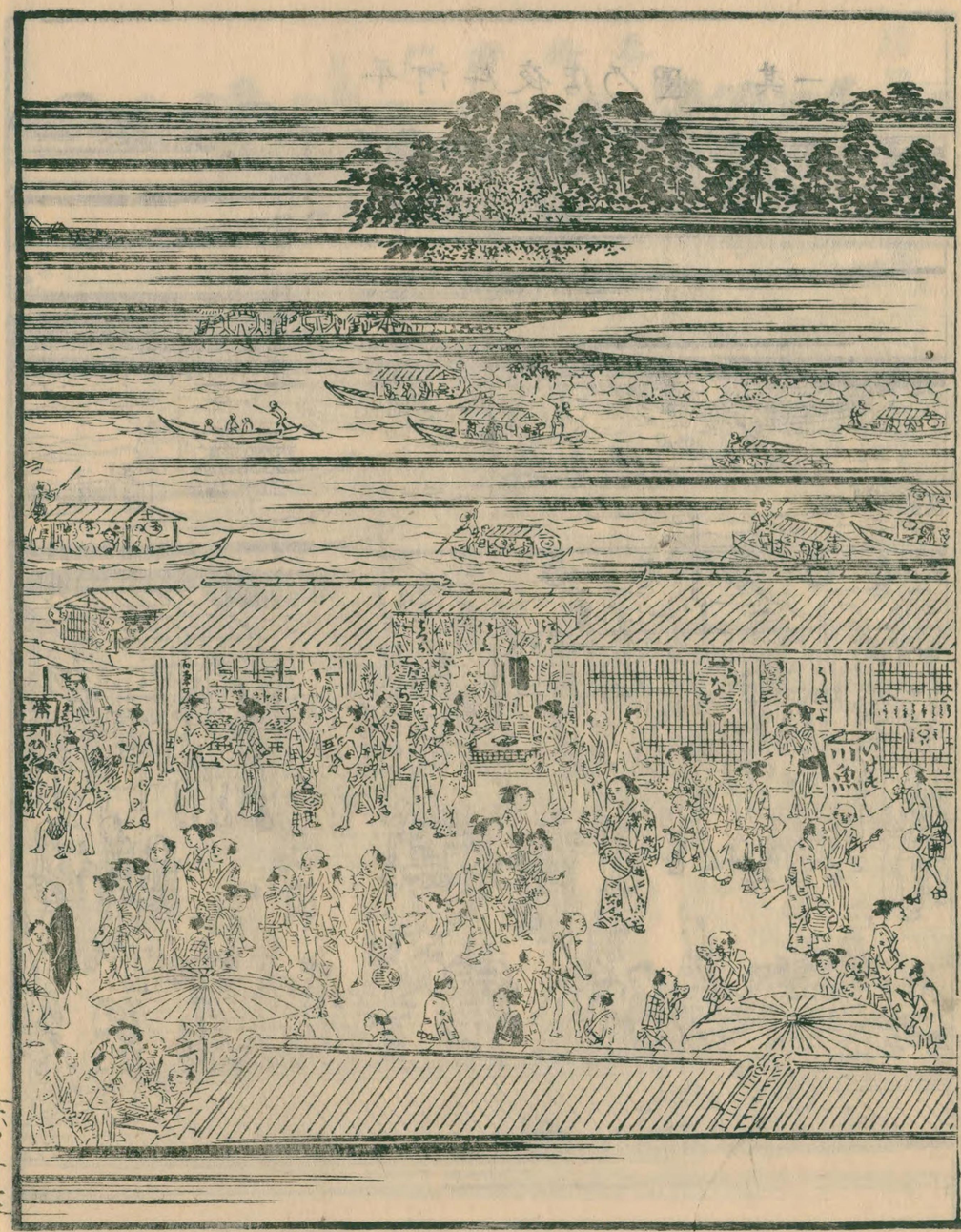
託根能得所萬縷影重重相對緑陰底使人輙歛容

詔賢山正住寺 東長町にあり法華宗一致流京妙覺寺に属せ旧ハ真言宗なりしを文明年中妙覺寺真如院日住再興して改宗し



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

醫學館

寛政四年四
月十八日
官命ありて
創造せり恒
例毎月十七日
神農祭春秋
之物産会あ
ると其他行事
暑し

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

ガラス使用

寺旧湊魚店とあり。慶長年中
元寺町寛永年中今の地に轉ず

力士蓮井象之助碑 寺内にあり象之助ハ寛永年間の人にして身長七尺五寸過く碑の高ハ其長に比して作るといふ又平生佩る所の雙刀あり大刀ハ身長四尺五寸中心一尺五寸小刀ハ三尺餘也銘ハ左に載す

江州淺井郡之産蓮井象之助鬼勝行年二□九身長七尺強膂力過人又能相撲無有與此敵者頃年来在紀州一時使良冶鑄所自佩之刀勢如長戟鬼勝揮之擊之其易如轉骰子不亦快乎實可謂希世之巨力奇代之大男子者也於南紀肥前守藤原鎮忠造寛永丁丑十四年八月

湊築地 川口にあり南ハ大雁木の波塘より北ハ城山の波塘迄の間をいふ

天保七年五穀熟らず翌年に至り米價ますます高直にして賤民餓に及ぶ者多し加之疫癘流行し道路に倒る者亦少からず官此を憂いて茅舍を建て病を療せしめ或ハ巷衢の便まして粥を施すといへども窮民犯弛されど更に川さらへの擧あり抑海路の運送年々小繁く川口塵埃に埋れて潮も瀬と變り通船に便宜なきに及ぶ其窮民をして土砂を堀を地を築かしめ其用度を與へ食餌を收むる此擧五月中旬より始て九月上旬に至り人數凡老若男女を合日々數千人に及ぶ築地の廣袤南北八町許東西一町ばかりにして海潮の衝る所水底の淺深定まらざる役民多くハ氣力微弱にして脛弱それハ土砂を運ぶ運ぶ弱ねと勢なるを以て遂に其功就まり實に救荒の大擧といふべし

漁者 湊上町網屋町材木町植松町の四町を漁夫多し因に上古海部の大抵を左に載す

應神天皇の御世海人部を定め大濱宿禰を海人の宰とし

湊築地の景 并に

御船蔵の図

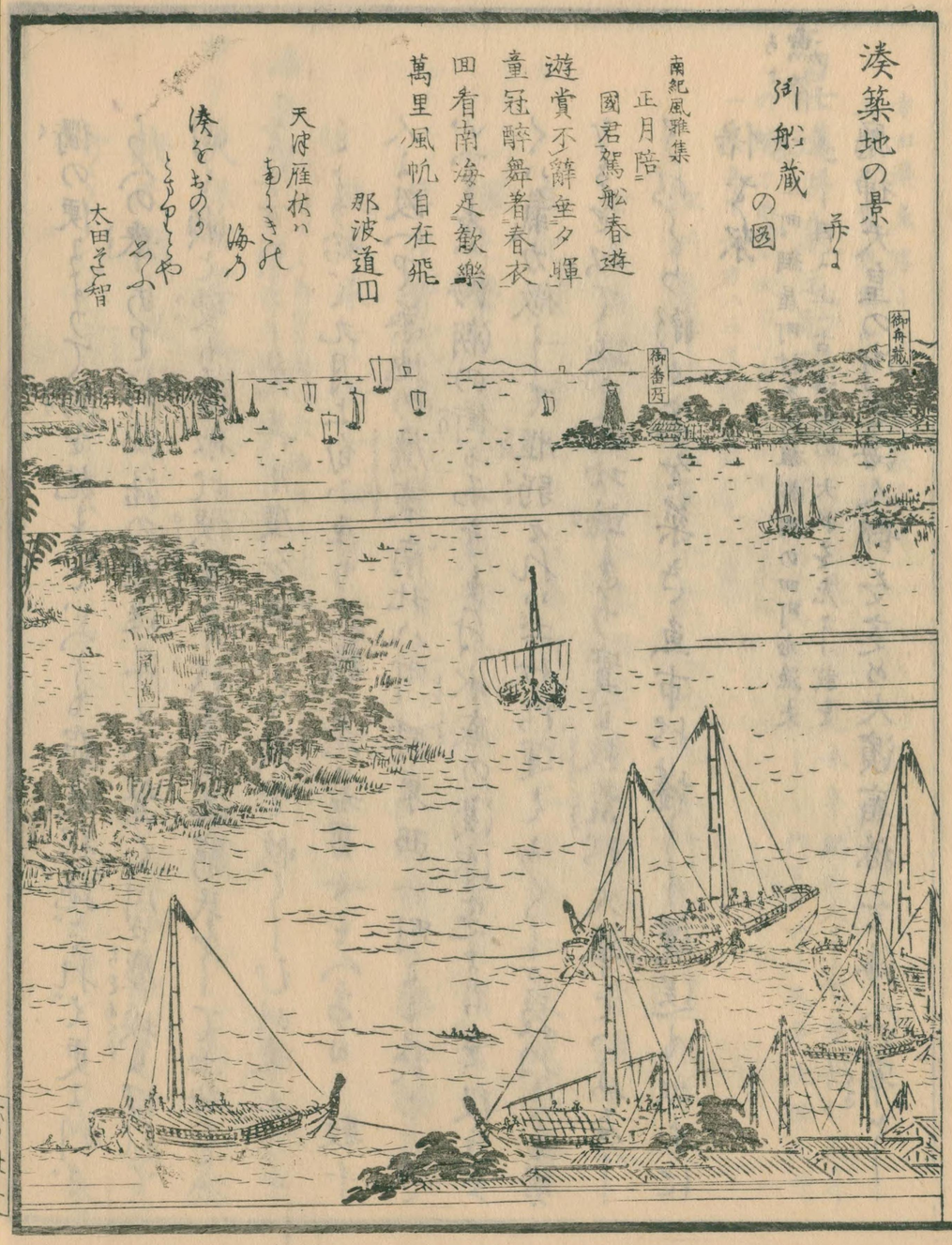
南紀風雅集

正月陪
國君駕船春遊

遊賞不辭童夕暉
童冠醉舞着春衣
田看南海足歡樂
萬里風帆自在飛

那波道四

天波雁枕い
湊をおのう
太田そ智



同

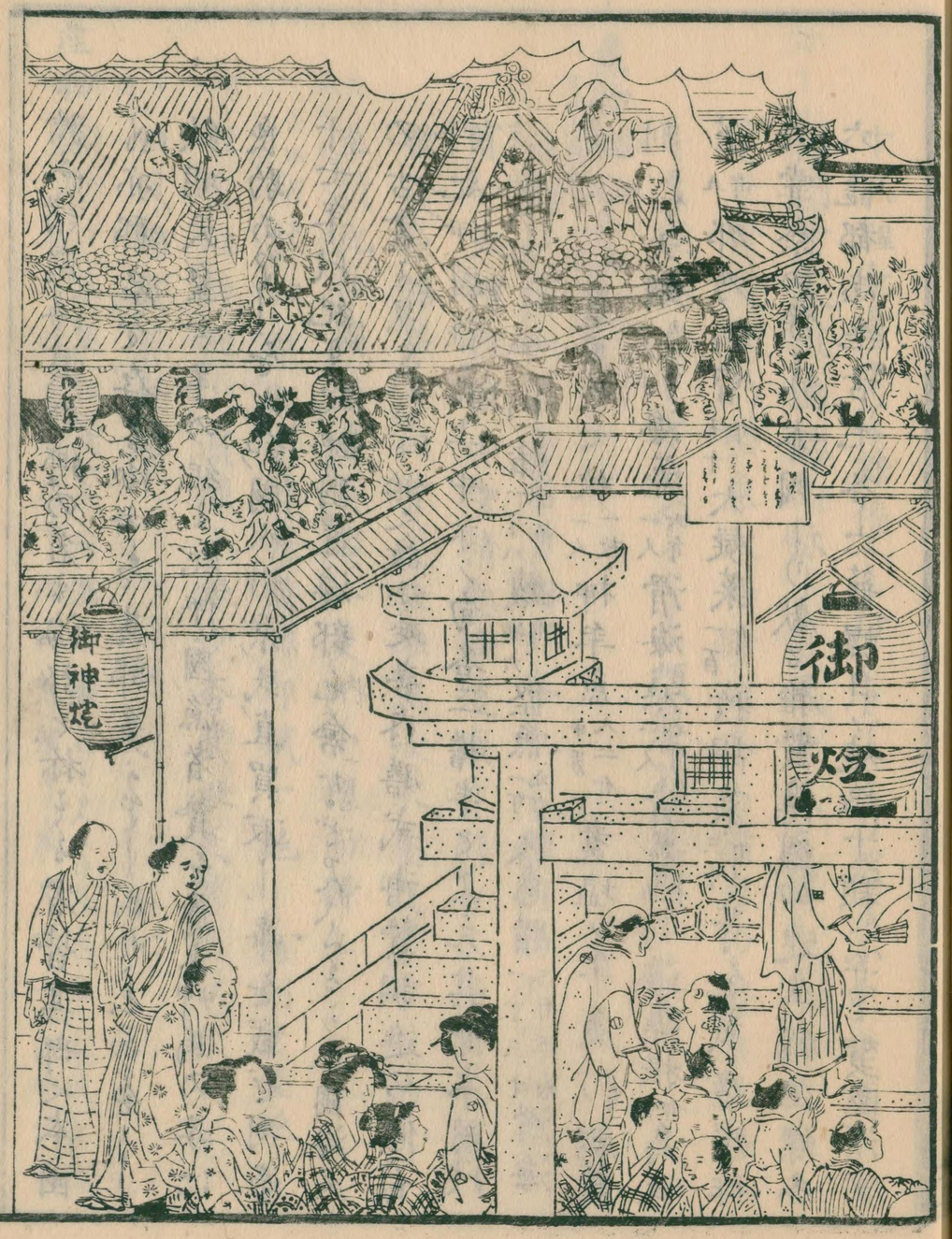
夏晩泛舟海口

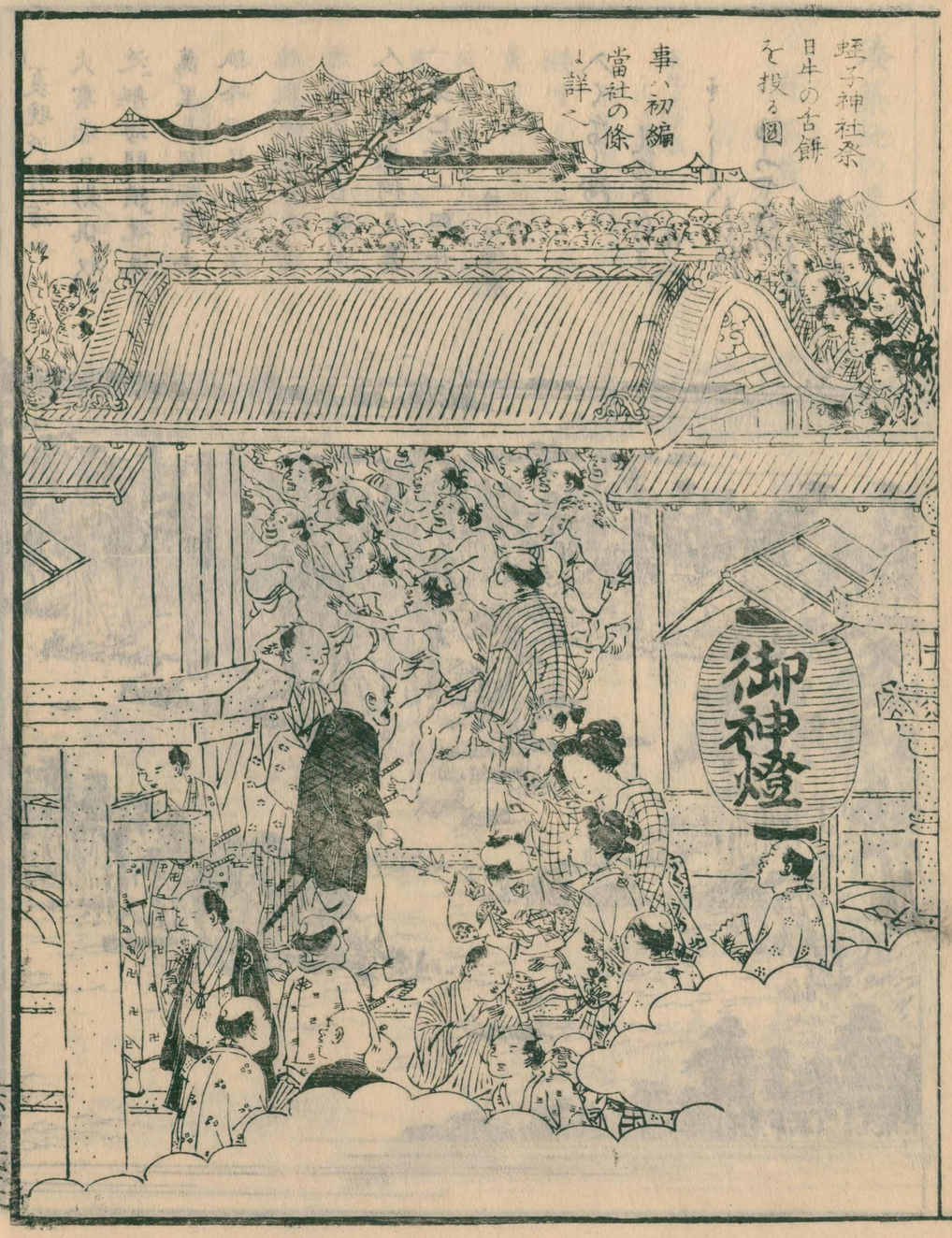
火雲赤日影俱收
泛艇海門横晩流
萬里長風驅暑去
孤峰明月送涼浮
棹歌遥唱青牛渚
漁笛忽驚白鷺洲
人世聲譽何足慕
一身已任一輕舟

井口仲虎

入くるゆ海る
光のあけき
ゆつやみの
本居大平

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

給ふ諸國海濱郡郷の名は海部と称する者皆其部く本國も亦郡名を存もおゆ其部多うもしゝ出る也しゝ
欽明天皇七年の紀は紀伊國漁者贄を負ふ艸馬の子に
良駒あり〻を大和國人川原民直買取一事を載せ同帝
十七年は紀は紀伊國置海部屯倉などゝ見るこゝ本國海人
の古書に見えらる始め故小延喜内膳式御贄調進の條旬
料紀伊國雑魚上中下ノ旬各三擔半と見え其他本國は
貢調の中に塩一丁三十 鮪一丁八十 鯨准六 堅魚一丁九 久惠腊一丁三十 滑海
藻一丁八十六 亀甲十七枚一枚 押年魚中男一人二 煮塩ノ年魚一人七 鯛楚
割一人三 大鰐一人十五 海藻一人六 滑海藻一人二 青苔五十 海藻根十 鳥坂
苔五 那乃利曽五十 大凝菜一百 於胡菜三十 等を載せ踐祚
大嘗祭の條に本國より獻る雑贄薄鰒四連生鰒生螺各
六籠都志毛古毛各六籠螺貝ノ焼塩十顆八年に賀多潛女
十人程を量て採備へしむと見えたり然るに中世浦〻も
権門勢家は漁釣と称し荘民寄人と號し〻神祇官の
亀甲齋院禊乃堅魚大膳修理木工諸司の海藻雑魚ホ
なども進濟せそなりぬるより類聚符宣抄に見へも

産物

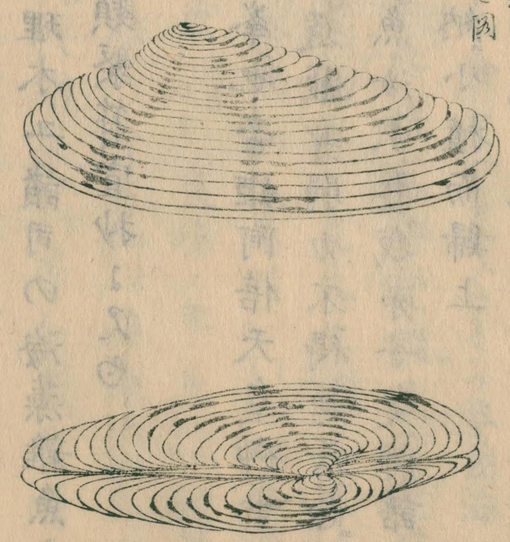
鯛 湊川を上品とし若川これに次く 日本霊異記

吉野山有一山寺名号海部峯也帝姫阿倍天皇御世
有一大僧住彼山寺精懃修道疲身弱力不得起居念
欲食魚語弟子曰言我欲敢魚汝求養我弟子受師語
至於紀伊國海邊買鯛八隻納小櫨而帰上
初秋四日紀川浮舟遊漁即賦一絶　藤朝臣俊純
輕舟短棹紀川濱緑水銀沙杳莫垠炎暑未収秋未見
西風網裏紫金鱗

産物

簾貝 山家集に吹上の濱乃簾貝と見えるる是なて本國名品乃一種也 今府下に西荒濱より産す吹上の旧地なり

形を以て名とす品類多し直ゝ簾々と称するもの一名つちゝともいふ
形筋蛤々ゝ似て肌淡褐色斑文光澤あり横ゝ溝隴相並ふ雌雄あり
雄ハ厚く長し雌ハ薄長くして色淡黄ゝして理文細く文点彩色も濃なり
其大なるを香合ゝして翫ふ又姫簾々あり一名ヒメ々ともいふ形芦々と
いふものゝ似て肌灰白色ゝして褐斑あり又阿波簾々あり形姫簾貝ゝ似て
肌淡褐色ゝして深褐の斑文光澤あり又伊豫簾々あり形簾々ゝ似て薄く
く肌滑ゝして淡褐或ハ灰白或ハ深褐斑あり斑ゝして綱の如し又ゝ簾々あり
一名姫あさりといふ形伊豫簾ゝ似て薄く
肌淡黄色簾のごとき横文理あり其一二を図
し



吹上御別墅の舊跡

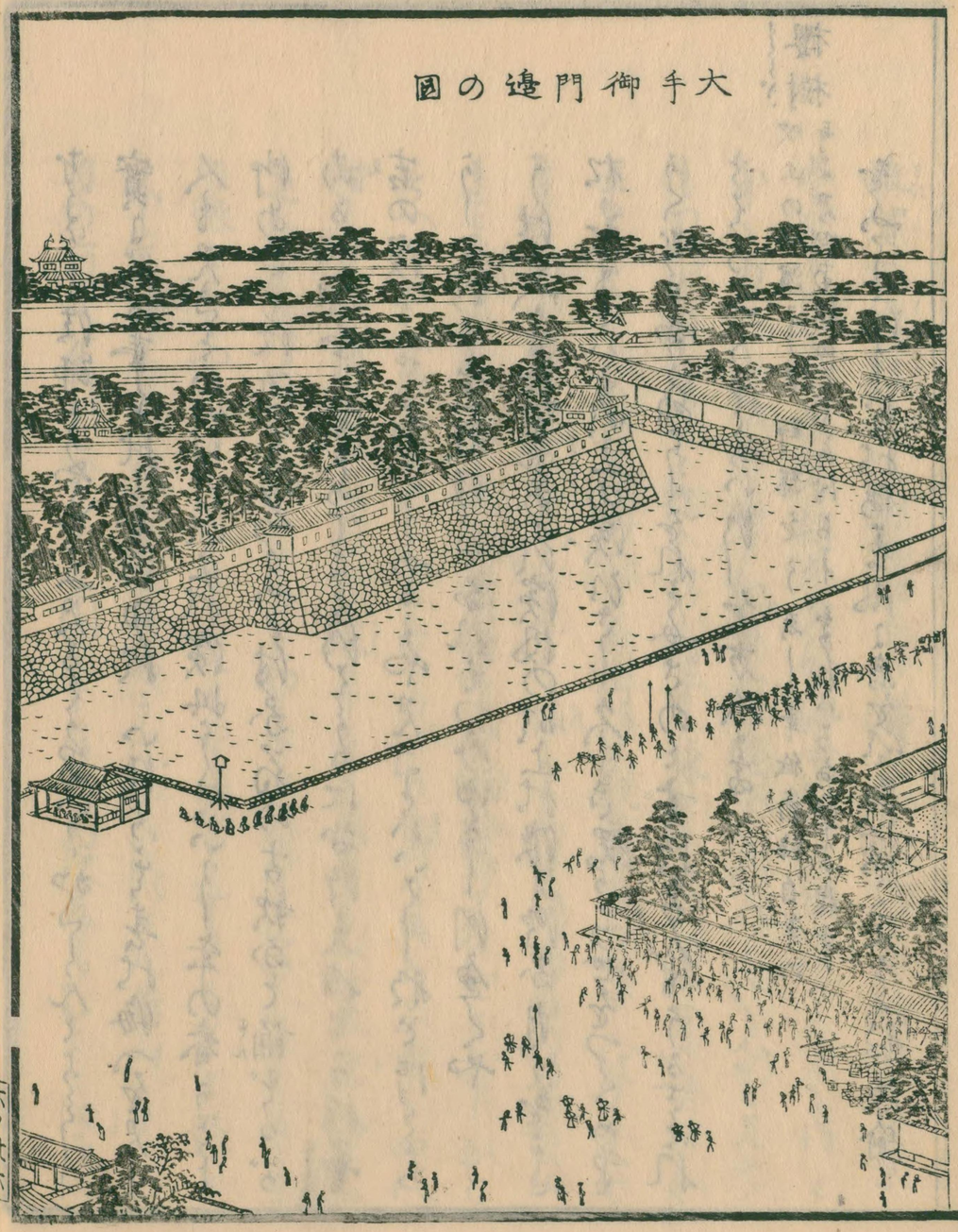
出口の西ゝあり今は㐂屋鋪といふ元禄のころや森十兵衛といふ人の記あり古のさま想像すべし

吹上御別墅の記

凡海山はそこれとうるはしき色をそなへたりてそのしめるふ
事ハ大和もろこしに古今ゝわたりて人の心をのゝ性を
養ひ壽をすくすもなりぬしさるハ此ゝ上の濱
ハえより名ゝおゝ所なゝ我君なりしより御浴し
出給ふ濱川のほとりのゝみく松乃末末ゝく
立ゆきよりあるゝつゝるゝこのわれおまゝあるらく
もつゝるれおうを殆れ出はやをわくゝ出ゝるまの打く
愛ゝ渡ゝを殆ゝて逍遥しおゝゝ府城をゝか
ゝ事ゝつゝて数所おゝ出かゝ軒端もゝと近をれとゝ人の
ゝ来る道ゝるれゝあゝねゝ常ゝゝ拘静ゝゝ西ゝれ
ゝゝゝ和田ゝ原ゝて浪ゝすゝゆゝる淡路島ゝゆゝく
ゝゝゝ阿波ゝゝゝと者ゝゝも近ゝくゝさゝゝゝゝ所多ゝ
ゝ又此ゝ國のうちゝ名ある所数多ゝゝゝ中ゝ和歌浦

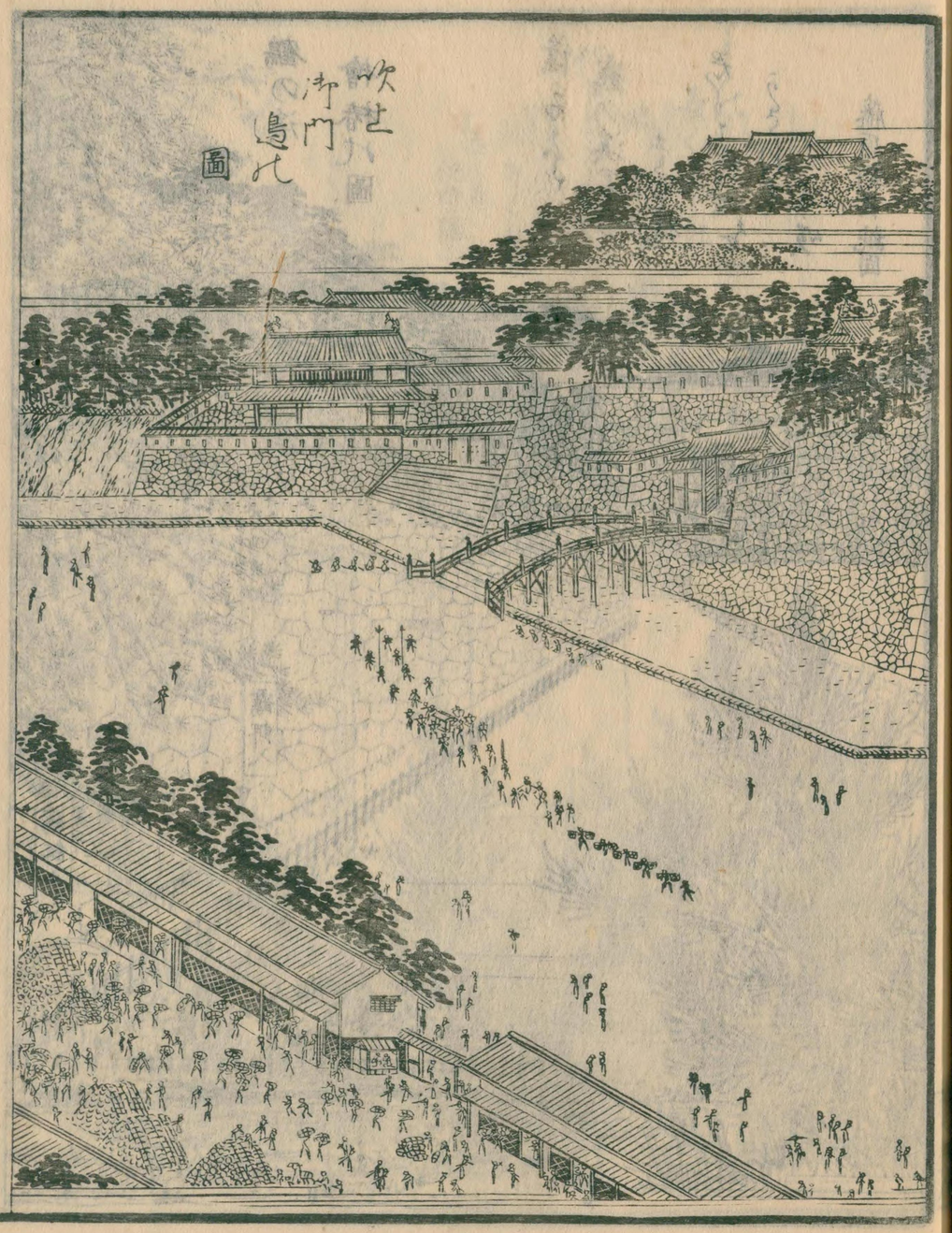
雑賀の崎[illegible]浦わくらの濱なとやうく此けしら梨
みきりてきこれハ朝かゆ[illegible]海士[illegible]小舟の漕めくるもほと
あくあこ[illegible]のゆる聲和布苅塩やくおもの[illegible]
もつれくなる[illegible]ぬと詠をれ浪たいつとふく
立[illegible]きしあれを楊[illegible]あはちむれ浦風の涼しけ[illegible]
[illegible]れ小船の淺茅生のうら枯[illegible]わ[illegible]の虫のねをあハ
[illegible]を友[illegible]千鳥[illegible]小假寢の夢をさ[illegible]
[illegible]ていはけくもへくもあ[illegible]集め與あふ中[illegible]四[illegible]
[illegible]の[illegible]ころ殊[illegible]
遠山[illegible]ふと出るすもさわ[illegible]
の浪なう[illegible]
文して曉ちく成ると[illegible]
目の前なれ[illegible]

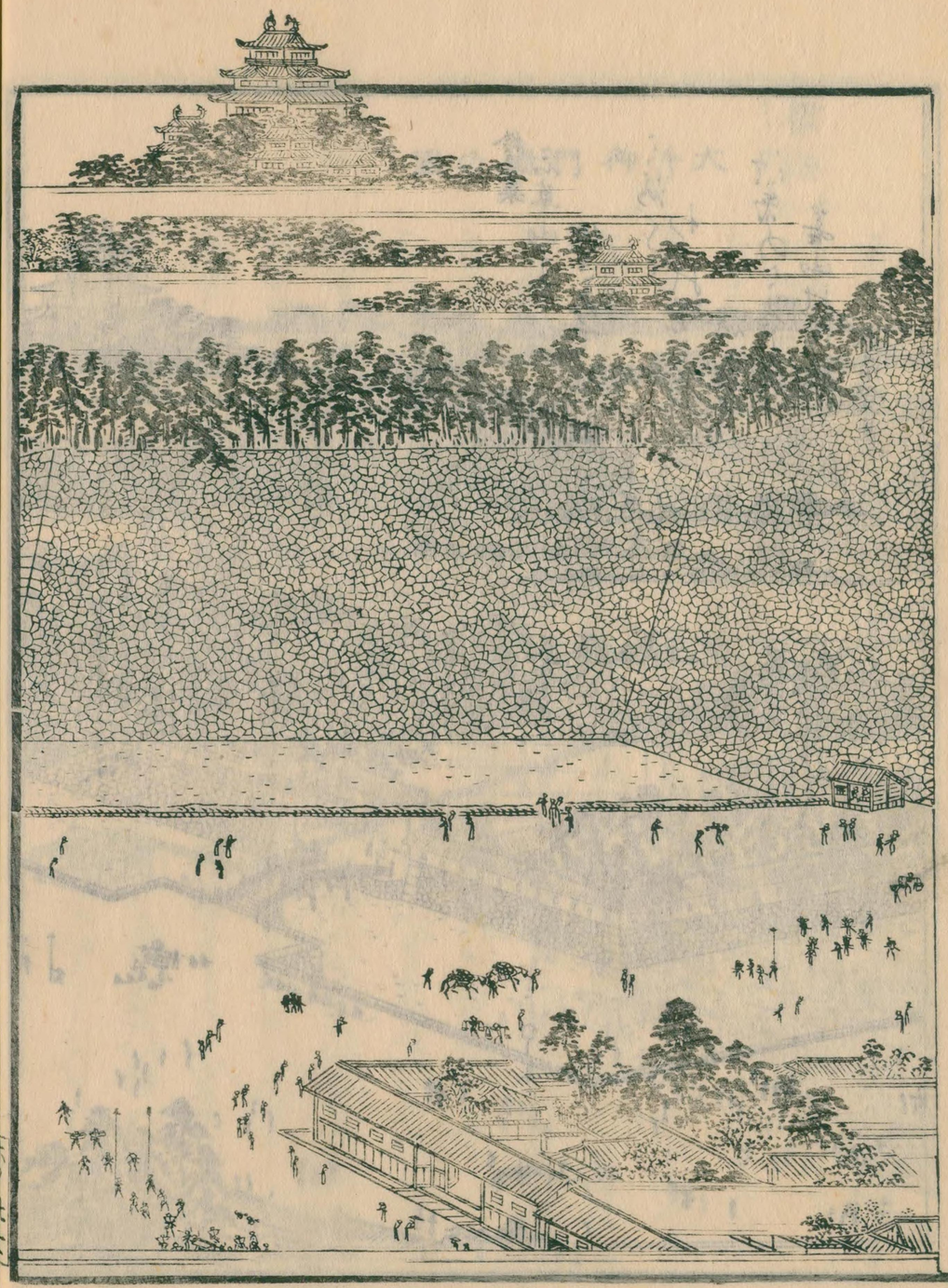
[illegible]法師とやをみ[illegible]
實よ[illegible]事とをおほゆれ
人も[illegible]といはけ[illegible]
[illegible]あ[illegible]
あるに作事[illegible]
吉の濱をおもひ[illegible]
[illegible]
[illegible]



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

吹上御門遠見圖





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

鶴の溪
檜椿れ圖

蔭あふく
鶴の溪ゐる
さゝ竹は
君がちとせを
うゝもれて
ぶく吹
藤原朝臣純固

山吹
鶴餌入
鶴餌入

檜椿

ゝれて
長く久し
吹あれて
ちゝ
多夏
九十二翁
佐野隠山

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

八重檜椿の図

鶴溪内部の中にあり

浅野氏の頃鶴を飼養えれ所なれい鶴の溪といれう
けれども今も鶴の餌入といれ傳へる器二つあり名
のこれる千巣ありて殺るべき改をとめるハ珍し溪の中
ハ苔深き巖の窠常に滴り汀の亀弟代の數を負重ねて遊
べ仙人の洞に分入るこちたされ八千代乃玉椿も而えうほ
るを繁りて幹も枝葉も枯ぶる似るを敷多やとりて
瑞々しく生立れハ檜榿と名付きて此溪に名高る一種
なれり巨勢山に別く椿紙屋川辺の落榿代数といふべし
花ハ白殷なるハ更にもいと八重も咲くるを溪
列りて種この名ありと枯葉乃やとけるハ紅しの玉
川の柵なりて言垣り咲うれる山に千本八千本なれき
うしてこの風に散る霧もなるし

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

一重椿の図

大手御門　京橋口よりむかふ城隍よ架せるを一の橋とふ

御舞臺　西の丸にあり

鏡玉集

御使をつかはせりかりもとれる猿樂侍されて八十餘人の賓賜れる事あり比八月十餘三日の夜さえもとれる雲傾き海出て鷺も木立も白妙なるかりもの千歳をと舞出る面白ものといふんも中こそ　藤原千廣

萬世ふるみのおとにさそはれて雪くもうてゆのはるかすみ

藤原朝臣純固

吹上御門　大手御門の西にあり鷺に鷹の羽のうち遠の紋あり浅野氏領主の比れ余波那也

幄高文集

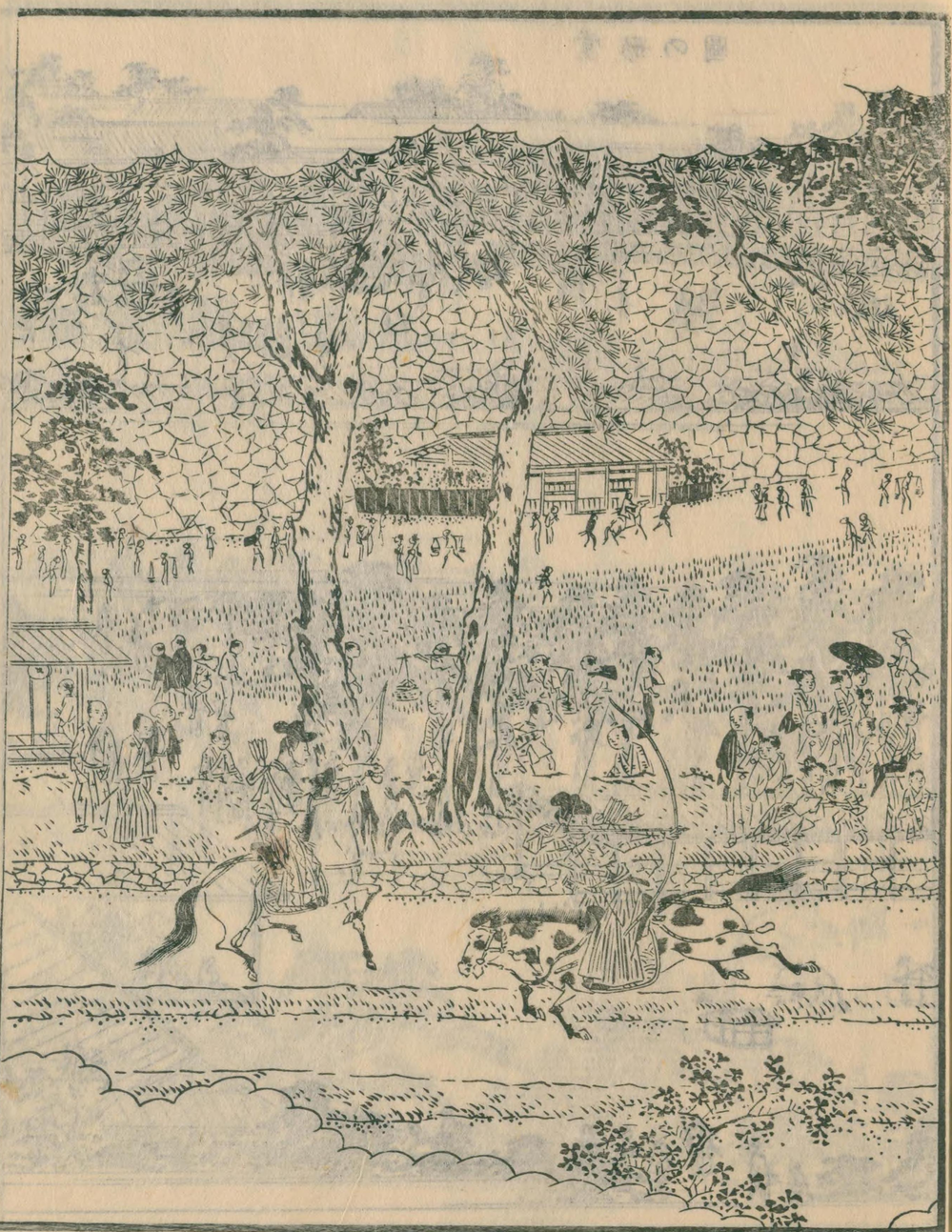
浅紀州太守庭前芍藥

滿庭芍藥絶比倫白く紅く錯雜新亡頼國家賢寄相除斯花外更何人

吹上冠木御門　吹上御門の東にあり

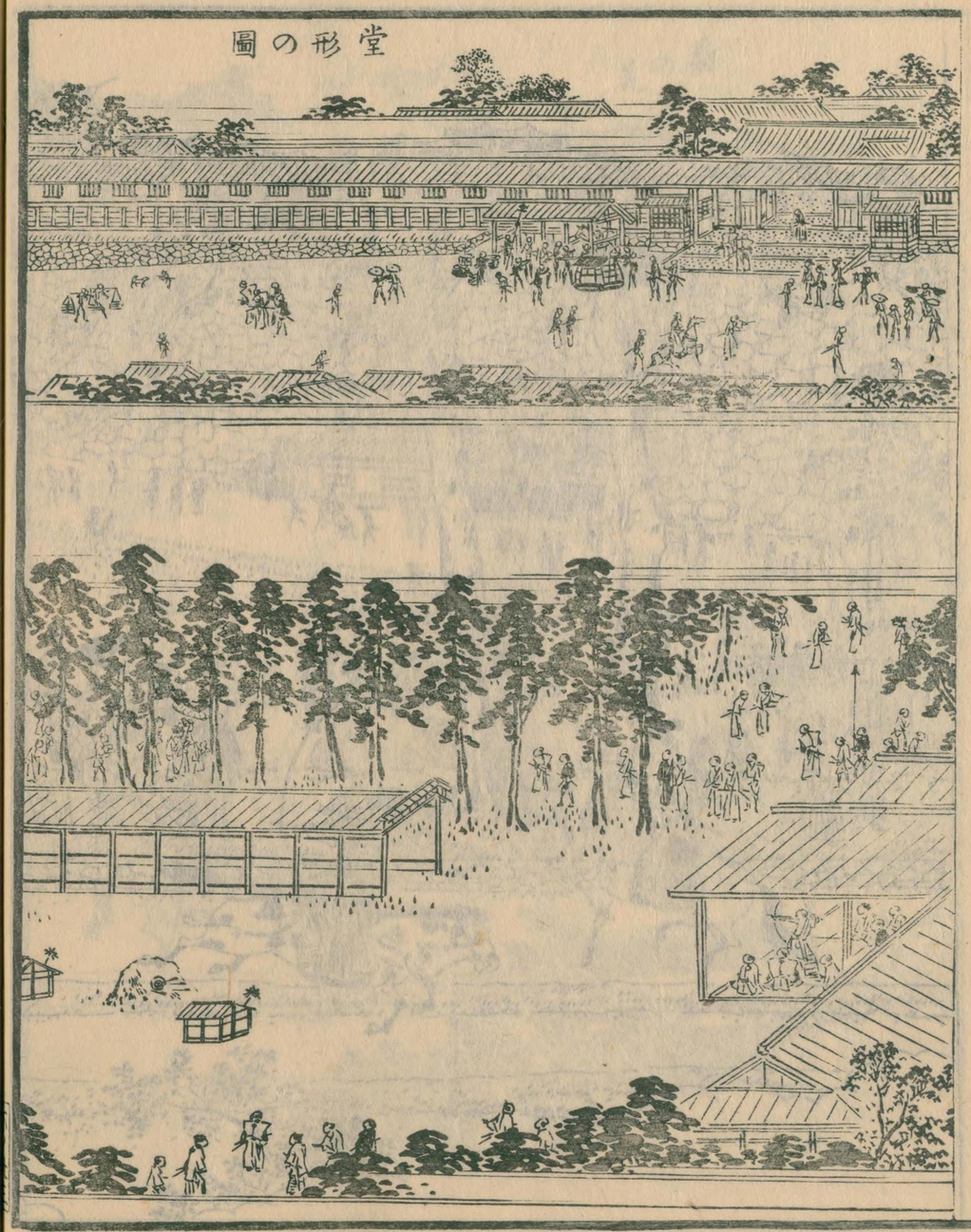
追廻　口邊往来の図

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

紀藩書感

頼襄

藩府形便接鎮臺吾公昔日剪蒿萊山分幾甸逶迤
遠海擁西南溝洸開平蔡功勲懋武殪殷戈戟馘
廉來移封二百星霜變誰識孤臣頭數回紀与大坂 脣齒吾藝

舊封元和之役歸順戦于樫井獲大坂 暁
将塙丹輪等故頸聯云々亂武用韓碑字

追廻御門府城の西にあり傍小馬場あり

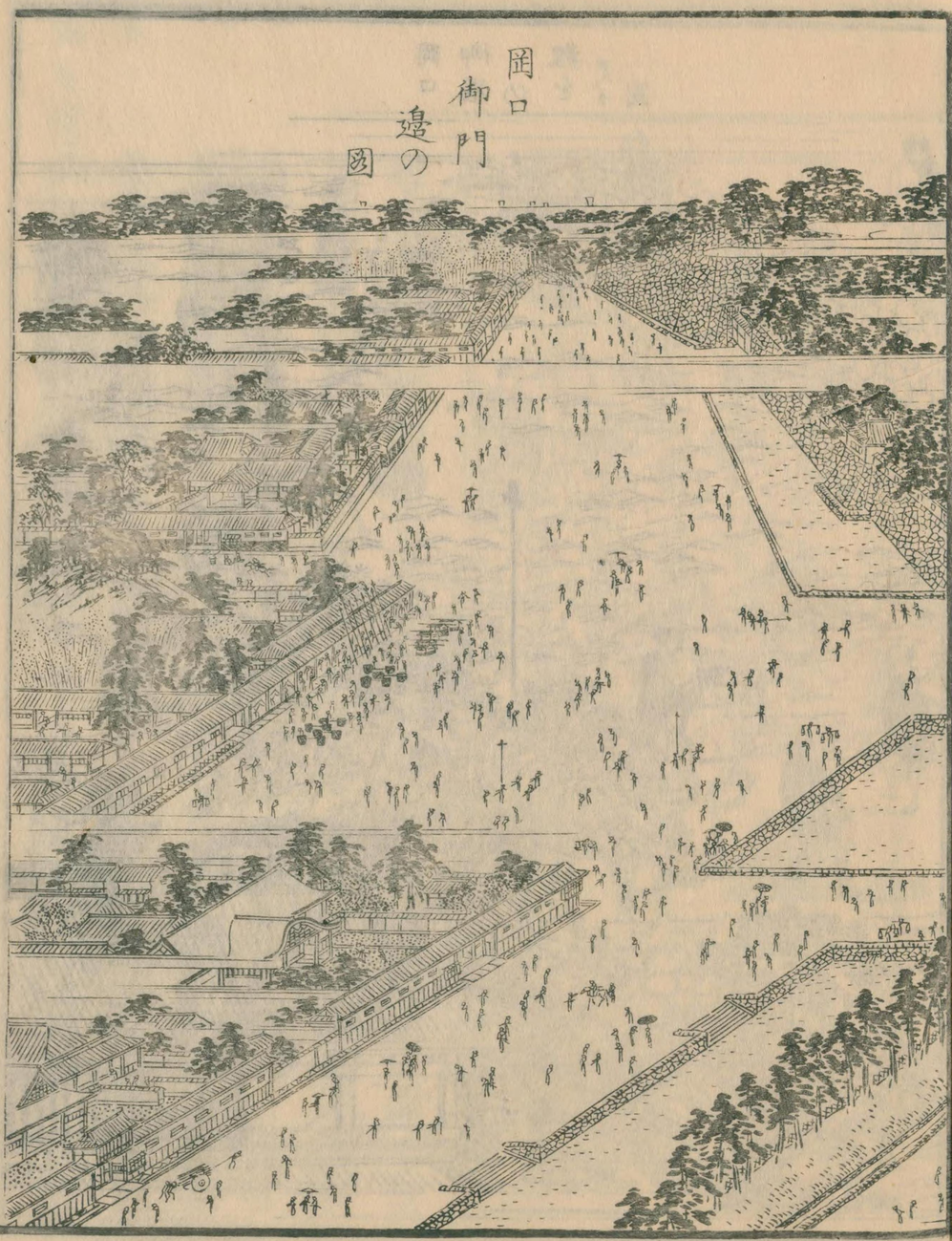
扇の芝追廻一口の南にあり此邊惣名松原といふ

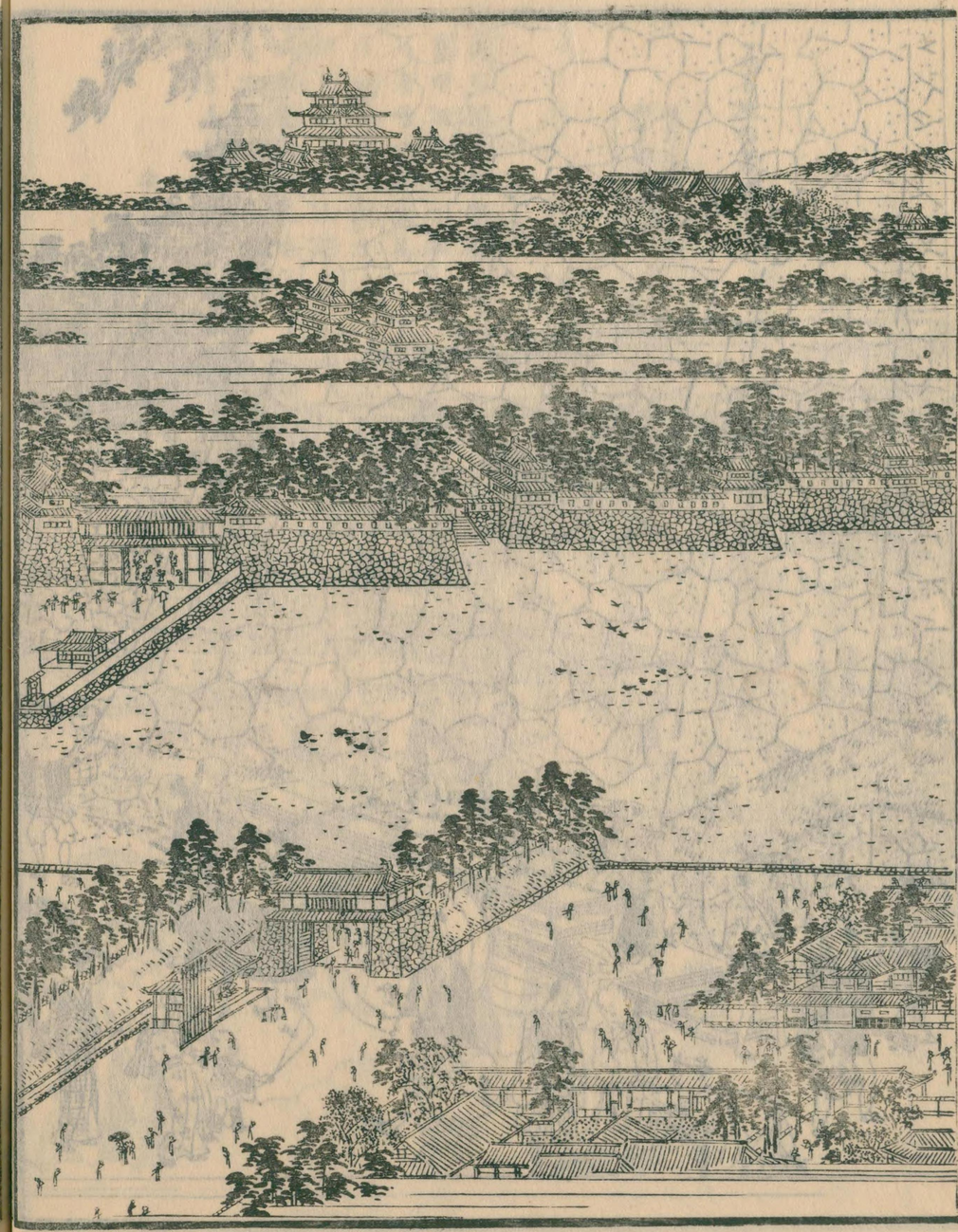
芝生の形北より東南に廣ごりて扇を開きたるやうなれ
ば扇の芝と呼ぶなるべし山城代宮居まあるといふ
名にも通へども是にさるる忌々しきにあらず茅世襲る要
の松さへ拉摧せり松の木本より道二筋にわかれ廣瀬吹上
に往通ふ人常に絶ることなし吹上の道は川原の真砂落ちた
廣瀬のそこに仆の林の蔭暗し芝生は喜兩の降てこれ

にて紙をはりたる地の紙を張まわしたるいま
にてはなほ遅くと和暖なる日々近きあるものの音郭として松く
ふるしく雪云の菓子屯食等をとり出すく賀遊のよねれ
をなしし日の頃くをも知らず傍邪なる馬場なれば沢山
に示す蹄に蹴られたる塵煙日にふるとなれきこ霧と立
のられてわきて流射の日に射手の裝ひとりくれ人人
遠近に羣来て土手に雙杉傳へ立ちぬ立ちおれてお
のづからを馳せ入

因にいふ古の制諸國に軍團を建て各其地名を以て某の
團といひて巻首に載せる天平弘解文に軍團の糒天平元
年定糒壹佰玖拾壹斛と見えたり即本國に團ありて國の
兵士弓馬に便なるを騎兵の隊とし余は步兵の隊とし然る
に其制後世廢きて本國に團と称し地今知ひ難し按る

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

岡口御堀の鯉をとる図

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用

は那賀郡荒川郷は旧村あり是古荒川團といひて大伴氏等武兵士武を講ぜ一所なりしの道音を訛て隠村と改めらるなり抑武事は天忍日命を以て始とし其裔大伴佐伯の二氏は分る本國上古大伴氏の徒名草那賀二郡ハ充満せりハ武事盛なりもん事初るなり其一二をいふ敏達天皇時御世は宮治大伴連あり神亀元年は大伴櫟津連子人あり天平神護元年に大伴宿称人成あり寶龜年中は大伴孔子古其子船主其子益継其子貞宗等あり皆古書に見ゆ又霊異記は沙弥信行を俗姓大伴連といふ陵記は大伴部押人の先祖を本國の人とあり其他仁壽四年の田券は伴宿称元弘年中の文書は和佐又次郎大伴實村小倉孫十郎大伴兼綱等見えたり按るに源平盛衰記は粉川寺は開基孔子古を誤りて大伴小手とし小手は挟手彦の事をいへるとして挟手彦は孔子古の祖先なるより誤れるか或は佐手磨の誤か佐手磨は袖中抄は遣唐使大伴宿称佐手磨記といふを引て天平勝寶二年紀伊國は帰着をといひ是も亦本國の人なり又雄畧は御世新羅征伐は大伴談連及紀崗前来目連力戦を事紀載を崗前連は今名草郡岡崎郷の人なるべし是は談連も本國より出し人なるやあらん古本姓氏録は大伴大田宿称は天押日命十一世孫談連之後也とあり大田の名和名鈔名草郡の郷名なるべし本國の地名より起る氏なるべし然れは後世其裔種々別れ居所の名を以て苗字として本姓を忘れ或は家系を失ひ或は他姓を犯して遂は其祖先を知らざる多し

高石垣

郭の西は築なる石垣高さ数十丈故に高石垣の名あり石垣の上古松繁茂せり

岡口御門 内郭東の入口なり

城池鯉

大城を遶まる水玉松の緑を浸し長久の澄を汀に畫めるが如く鮮滑うして紋おる小さく浪いと静かに浮ぶを見て餌を與へしより漸く巽の一隅小寄来る鯉年々に数を増すに何の時よりか癸餌或は焦たる麦などを投げ遣ぐ者其傍に多くなる店を構へ行客に売り休らいて癸餌を買て水上に投ずれば二三尺にも餘れる鯉いと多く群来て我劣らじと喰喝し或は撥刺かともに争ふを見て戯とも丹生川に釣を沈めしめてこれ伊豫の池の故事なるが如し

冷齋夜話小東坡詩我識南屏金鄉魚西湖餘爭倚檻投餅餌為戲之尺素寄仰幸之

南屏山興教寺池有鯉十餘尾金色道人齋婆の東

和歌道

南北に通ずる廣下より和哥浦に至る本道なれば名にし此道勢名を吹上と云是より新堀を經て高松に至る此道は元和以後開かれし所にて列松道を挾む直道なり古道は是より西にして地勢大に變せり永兼三年関白頼通公高野参詣の帰路和歌浦遊覽し記古道のほとりを知るべしれ因て載せ

前編に引る庵主記公任卿家集の文なども併考べし

永兼三年記

十八日癸未 天晴卯刻供御膳所々饗餌を令立

御宿給之間召國司定家 此人傳不詳名草郡藥勝寺下せる治暦の官符小據に

永兼二年 本國の守に任じ同五年任を解る

賜御馬一匹 鵠毛 方棹華船迄于木

御川尻令下給 川上より船にて今の八幡堤の邊に上陸きれし成べし

是行路之便為

御覽吹上濱和歌浦也 已刻之終着御湊口 此湊口とは抵今の宇治ようと湊のほとりを云なり

御馬并人々馬共遲將来間光景欲

頓極興難抑仍先召國司陪從近邊所在之馬各究

騎用先御覽吹上濱朱紫比袖尊卑爭行于時蒼海

渺邈晴砂崔嵬如登天山似向蕊嶺湊より今福村を過き西濱村関戸村のほとりを通らせ給ふ此邊ハ一面の砂濱にてききハ山の如く聳きハ谷の如くおりゝ故如登天山似向蕊嶺と云へり夫より高松のわさりゝ出て松原へかゝる頃之經雑賀松原公任卿集るるりあるい公任卿の松原と見えたる是く令向和謌浦給翠松傾蓋白浪洗蹄是和哥浦より至りて海辺の男よりある松原を歴て濱辺より出らるゝあり翠松傾蓋白浪洗蹄と公任卿の集より翠の松小暗き中より白浪の起るもたゞ過さるとゝ云へるとゝ毎見風流之飽地勢弥感土宜之稟天然猶指點吹上之濱和歌浦雖山邊之説柿本之詞合此地亦難矣加之按轡扣鞍拾色々貝之輩已不別老若各任志之及棄興之餘殆忘日暮夫より濱邊にて貝を拾ひ玉津嶋の邊へ廻り給ひしかれとも暑していとざる成(公任卿ハ玉津島の方(先)行て夫より濱邊のうらへ)ハ(ゆ)ゑ因りて玉津嶋の事を委く述へて濱邊の事ハ暑せゝ未剋還御御船贄殿供御湯漬國司獻檜破子荷始自御料次々皆以色紙付標申剋於木濱御御馬自笠道山令通給御船とハ紀川を渡り給ふるを木濱ハ今の栄谷のあるりをいふなり色〻笠道山より令通給ふとゝ貴志栄谷ゝ葛城山の麓にて海辺

ら行れハ是より梅原へいたり三笠谷より和泉國孝子にてえられしを是古の本道なり山中秉燭海濱伴月亥剋之終著御日根御宿國司御儲如例

里宮山無量光寺大恩寺の東にあり

文政十二年徳本行者の徒弟官許を得て造立せ行者を推して當寺の開基とし末寺五箇寺を附せ堂宇尤壮厳にして參詣多し日く專念ゝ念佛懈なし

車坂稲荷社大智寺境内山上にあり

鎮坐の時歴詳ならぬ近世寺瑞新にして祈願の者多し其願成就せるに及て必朱鳥居を建りといふ故に社頭にて一二丁の間幾筋とも知れく大小數千基をつらね列りく松林中常小紅葉を觀るのこゝろ

登大智寺山即東雨餘邱景遠舍煙境近吹濱物色鮮磴脚竹陰遮日淨山腰潮水帶涼傳東南林嶺當標見左右秋田接戸連幽夢避塵無一事掬出半天月蟬娟

竹村荻渚

浅草文庫印

辨疑書目錄に金澤文庫并足利學校の事を記せる條下に山口本と浅草文庫の書あるいまゝ考へ（もとあれど此は本藩の醫板坂卜齋の祖江戸浅草の別莊に畜ふる羣書に押せる印にて既に丹波元簡が醫賸に板坂卜齋手鈔鍼灸聚英四卷有那波道圓及陳元贇跋皆真蹟卷末有浅草文庫印記卜齋名如春世為名醫好畜書居於浅草寺之北明暦元年十一月卒墓在竹門醫王院林學士信篤銘とあり今家蔵の書籍に押したるを摹寫して好古の人に示す如春の著書の中家傳ふる鍼灸資生經寫本道春學士の跋あり又関ヶ原日記あり此書のごとき既に鈴屋翁の玉勝間にも見へたり又宋板の編年互見圖後圓融院天皇永和二年に雕刻せし書偶遺ふるを得て再板せり此板今七巻の巻末に道慶真栄等の跋あり

鍼灸聚英跋

嘗観人之生也以水土水土之失宜則疾病因焉古之聖人既叡草木之劑調之兵然又以為草木効遅不若金火之功速也此鍼灸之書所録作也茲有鍼灸節要二書流傳於世久矣傷醫板坂卜齋翁重録而正之以珍其傳焉倘亦以金火衰水土之不及而起千百世之疲癃者乎不佞偶過齋頭披閲而有得于心遂濡筆于尤以旌吾翁力古之功明崇禎戊寅孟秋中浣十九日

虎林元贇謹題

暦代帝王編年互見之圖跋

璞以下而出劔自雷而顯一物且然況乎帝係者乎編年之成於卜齋犬人者豈偶然哉此圖乃有宋馬氏仲虎編集刊行渡于日域鋟諸梓者二百餘祀兵世遠人亡其板泯禹然而一篇辛存於禪室其字蠹者什一於是犬人即抽悠久之志旁求京師僅得善本參考互証費俸刊鐫試摺數卷先獻君長次須倚友可謂忠義之至者也走幸蒙犬人柔遠之仁寒暑而賜裘葛疾病而饋藥餌以保殘命矣今也投我以一篇其簡槩々其墨淋々其王之興廢其代之盛衰如見目今然則犬人非趨躋壽域於春臺抑亦植綱紀於茲世也君臣父子鑑此圖而懲感儒士擇氏覽茲書而多識豈玉劔之焉比哉且道慶鴻儒素結膠漆又得醫術忠告善道相焉輔仁醫圖既竣應請焉跋乃是鳳尾麟趾金聲玉振者也犬人之於謙菴斷金臭蘭雲龍風虎於此可知也夫讒菴天性剛直智足以知人明足以察理自診察至于終汚不至阿其所好也審矣

寛永乙巳陽月上旬　朝鮮國江陽君苗裔　李真榮謹書于紀州

浅州文庫

日前宮除夜参詣　廣瀬大橋を宮まで行程九十二丁をり

府下の俗除夜に疫除或は祈願あるる者裸體跣足にて腰下に志米縄を結び手に一刀を携へ神社に詣でるを裸参といふ

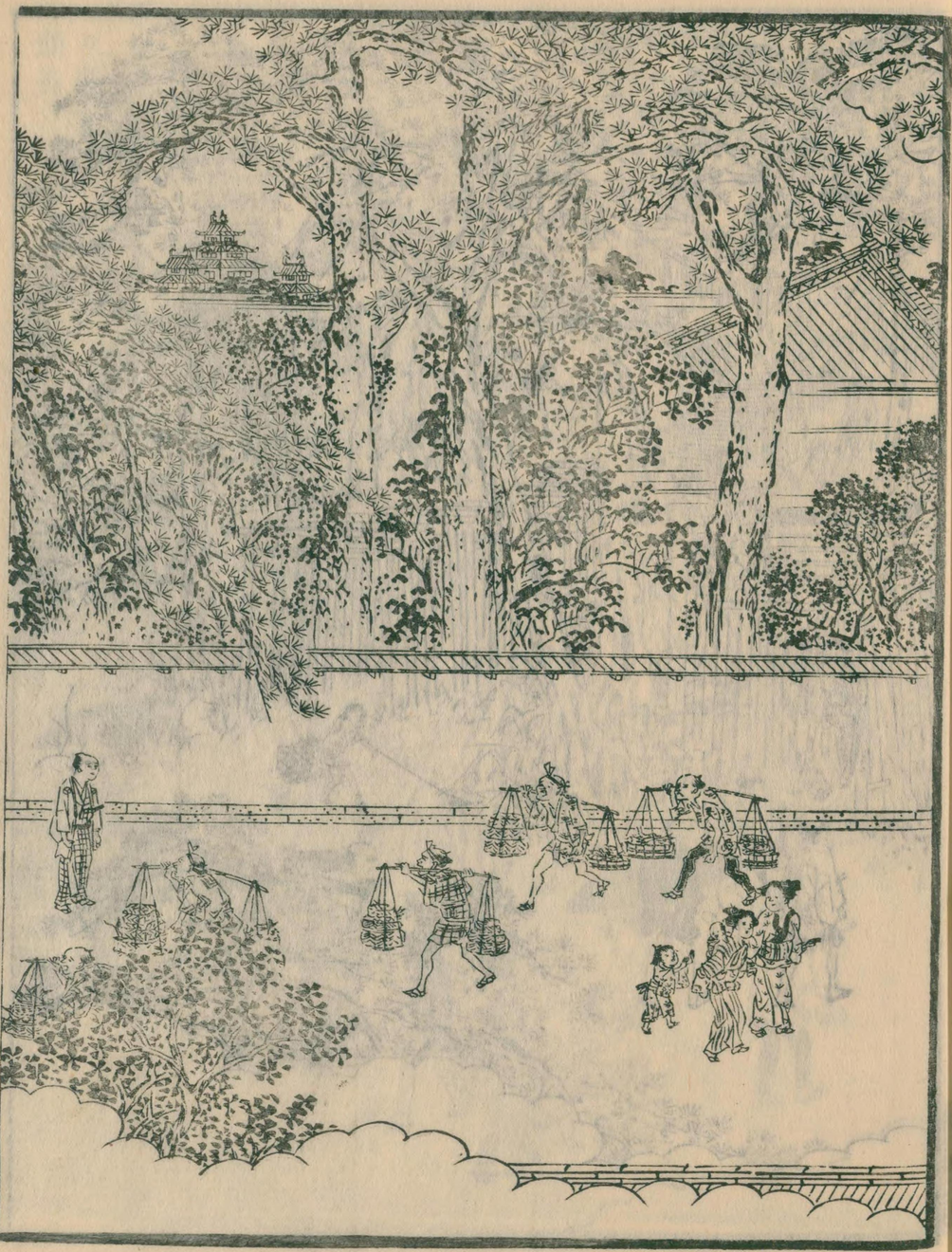
日前宮は近郷に坐して尊敬他に異なり詣でる者夥し廣

瀬の大橋其次に架れるを以て町くの者西より南より出あひて
羣聚をなし寒風を凌ぎ競ひ走れハうち音揺揺り雷紀
て雷の轟くごとく　奈詣の時志米縄をくきて社頭に枝に掛くるいま
因に云ふ日前國懸兩大神宮の御鎮坐等の事前篇誤多く先輩の説も區くなれと
釋日本紀に引る大倭本紀の傳正しく聞ゆるハ今此りのせく國造家暦應に
欵状と合を考へ
まふ大畧を示す

一書曰天皇之始ホノニニギ命を申を天降来之時共に副護齋
鏡三面子鈴一合也

本書註云一鏡者天照大神之御霊名天懸大神
也日前宮御霊是なり一鏡者天照大神之前御霊名國懸
大神國懸宮に御霊實日尊是也日尊を直に鏡事紀に令鑄造日尊此鏡少不
といふ證ハ旧事紀に坐所に坐ます事なふ今紀伊國名草宮
合意とあり内裏賢所御鏡なり故あふ事
今兩宮
崇敬解祭大神也の地是也一鏡及子鈴者天皇御
食津神朝夕御食夜護日護齋奉大神今巻向宍

師社宮所坐解祭大神也寛永雑記に云ふ國造家齋尊と申せる称あり旧記の傳も是に同し又齋鏡
なり然ふを天懸大神ハ地名の日前を以くとなへ
日前國懸兩大神の称起りて天懸大神の御名を
知る人なくあれるかふ後世日前宮と称し奉り
て國懸宮をも兼ねる称へとなるも古に遺称に
こそ又國造家に傳れる暦應三年に欵状の草案
に謹考固實日前國懸之兩宮者天照皇神之前霊
也和光早に南海之月崇敬年舊尊貌亦留北闕之
雲霊驗日新とあれハ兩宮とも天照大御神に
幸霊におはします事知る由し此文を證として
一鏡者天照大神之御霊とあるも前の字を補ふ
べくや猶考へ

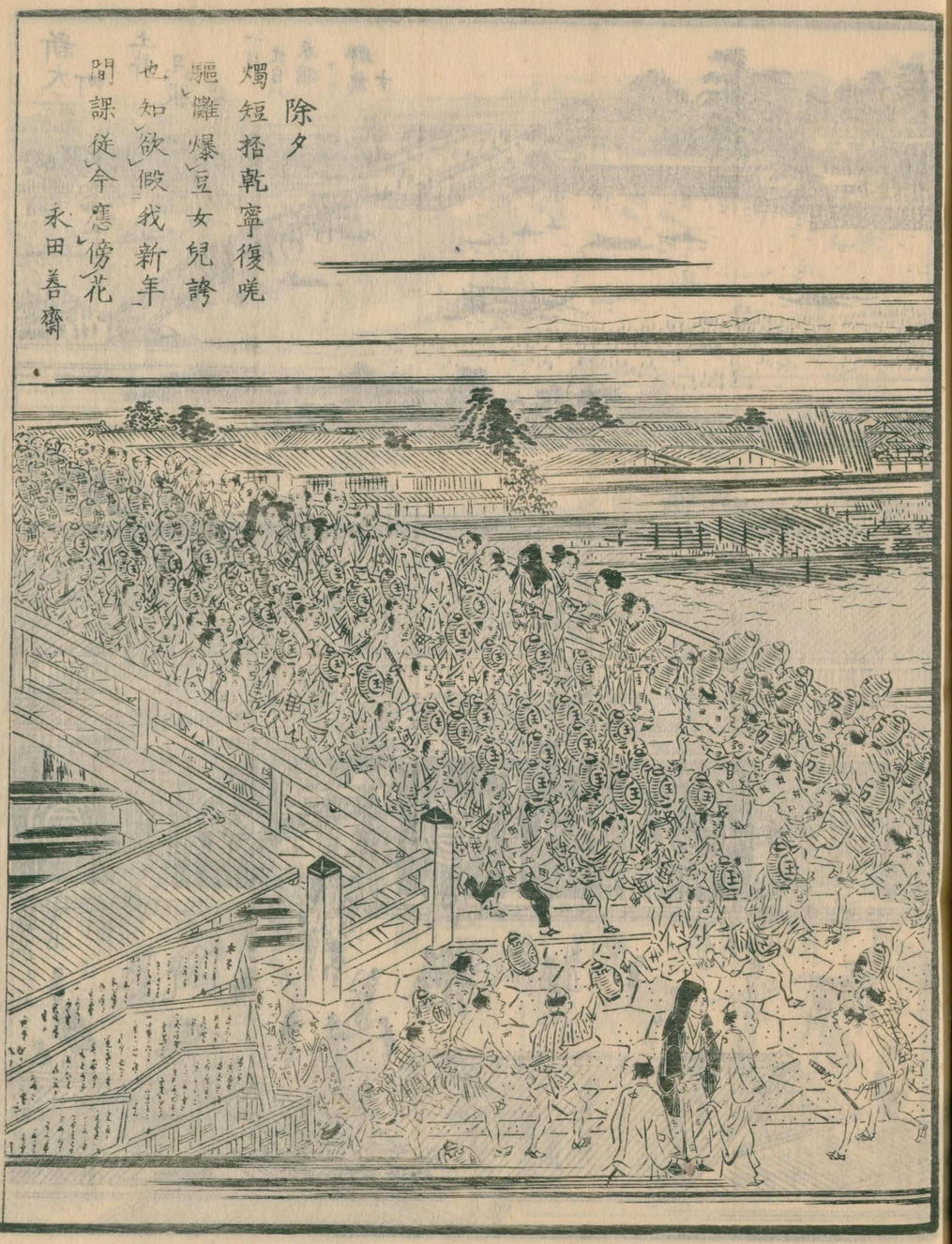


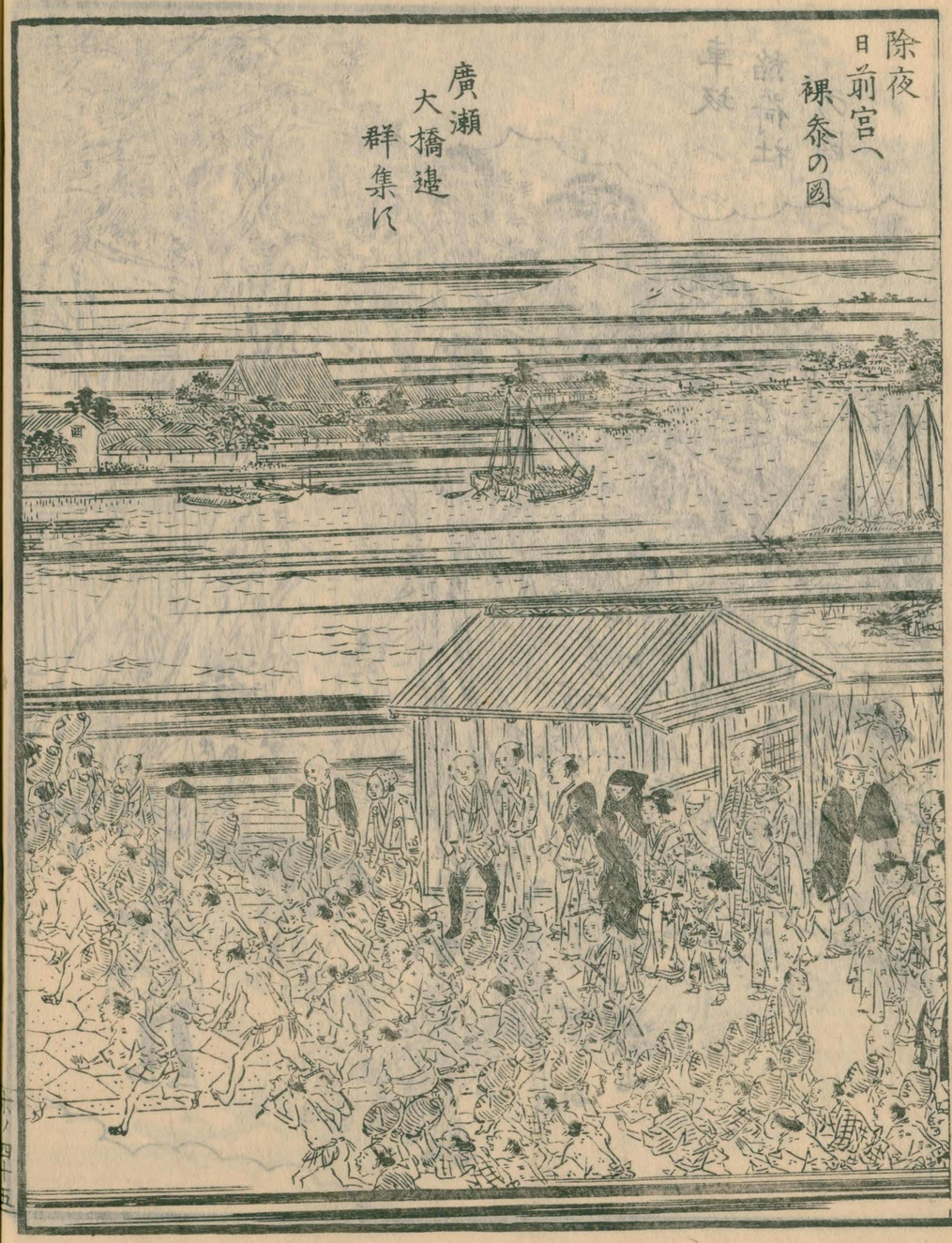
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

車坂
稲荷社
の図

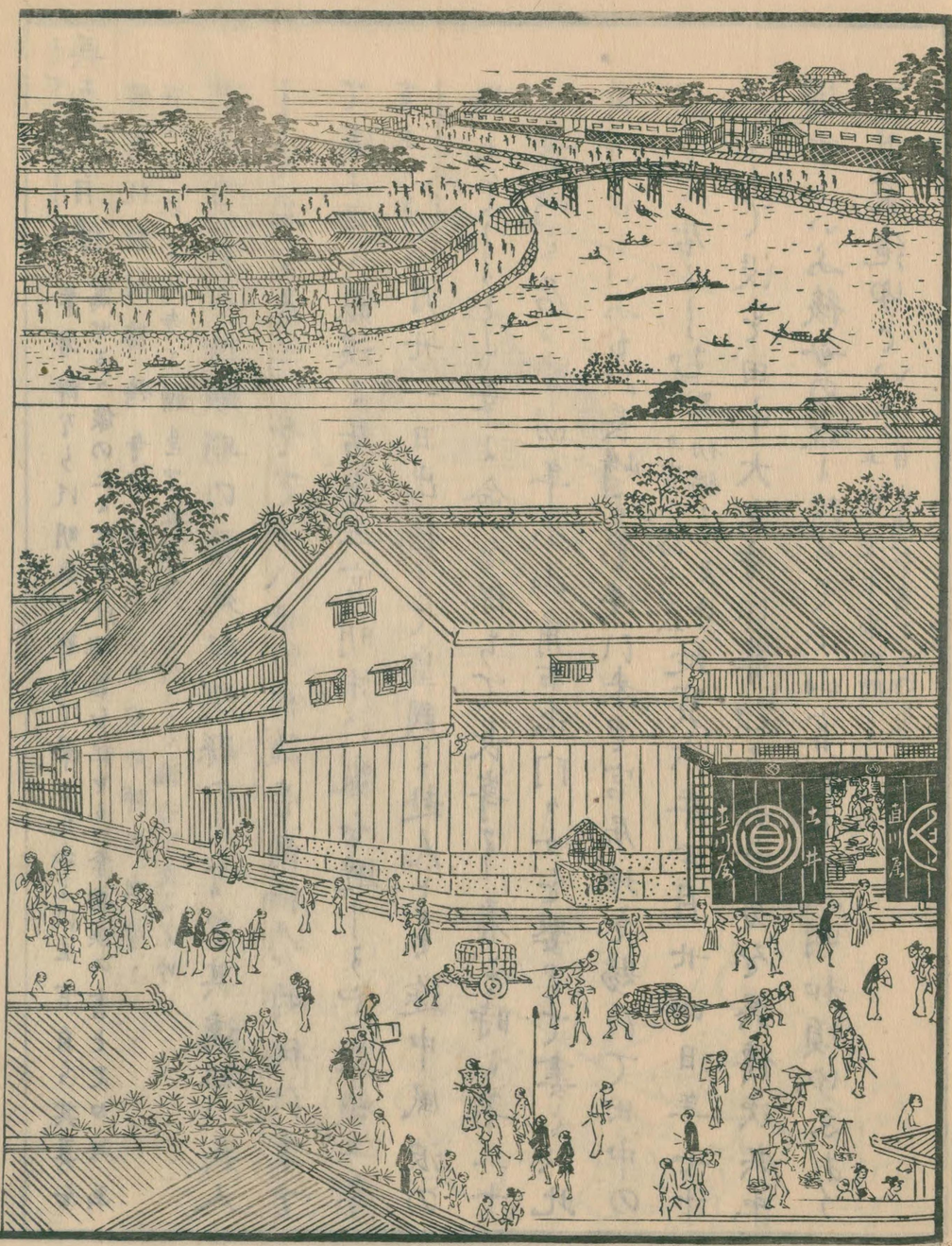
国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80

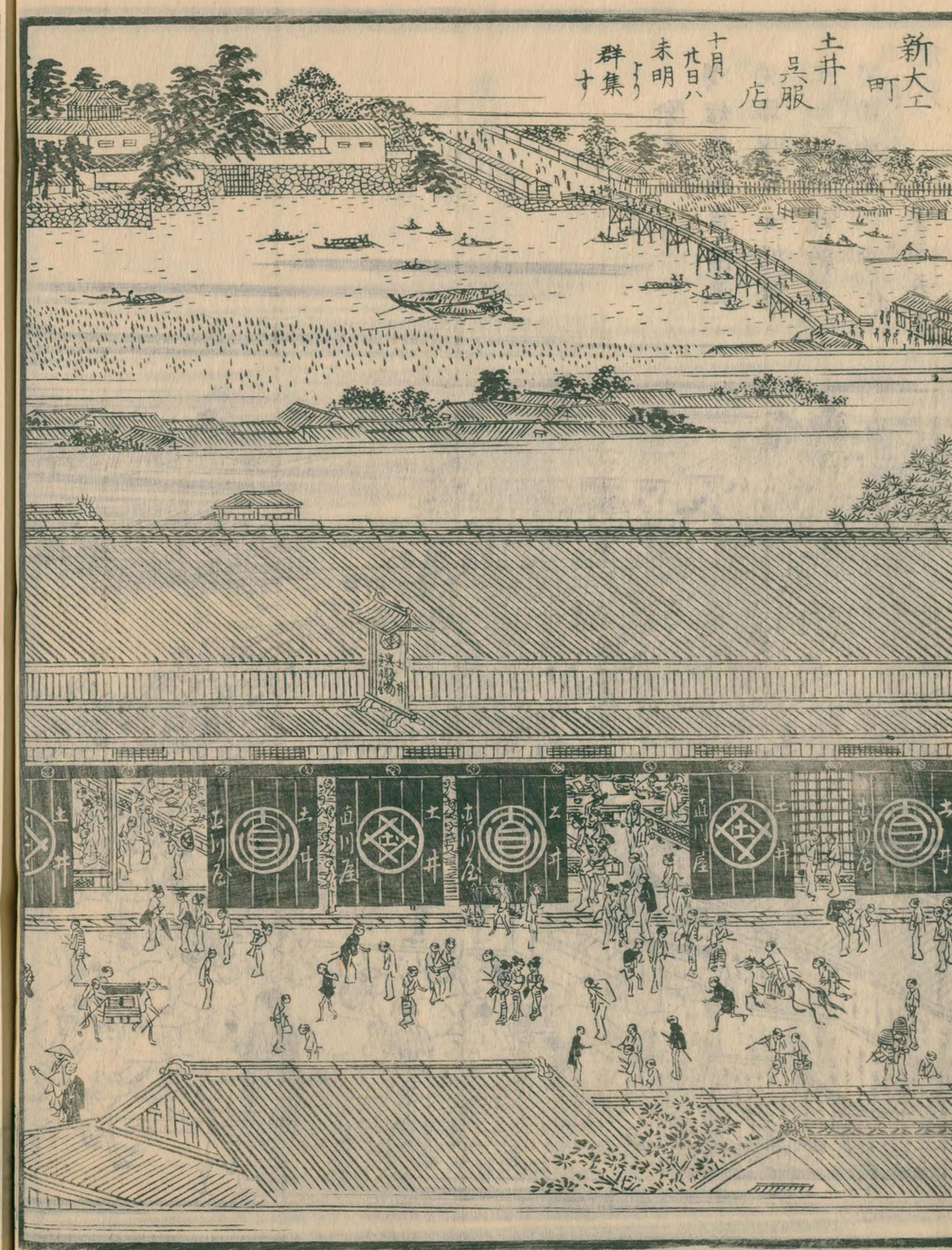
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

呉五官肖像

筆者詳ならず明画の躰よりて筆力凡あらず五官自ら其真を寫せるの像の上に生年月概略を記るハ李梅溪の書と見ゆ此画像奪取村惣持寺に傳へしの五官の碑大立寺小在るを以て同寺に贈きて其事ありしの像の下文に見ゆ

呉五官名は任顕明の福建龍溪縣の人なり其遠祖ハ呉人にして名を真といふ世に十八世の祖隨帝南徙の時従ひ来り て遂に世く龍溪に居を五官明末の亂を避しまや崇禎五年寛永九年にあるれて六月廿一日出帆して皇國に赴んとす途中風波の難あるしるも幸に命を保ちて長崎に着る時に年二十七長崎に居る事四年小山角右衛門の女を娶て妻とし北角清吉といふ人長崎より伴ひ来り官居地を賜ひて田中の図子に居らしむ今五官小路といふ延寶六年正月廿四日年七十三にして没る田中大立寺に葬むる其長男を呉傳次兵衛通古といふ後母の姓に改めて小山官記といふ明和頃ゆゑあり て其家絶ゆといふ五官七十歳の時に自小傳を書をる物あり

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80
ガラス使用

839
6
80

田中市 廣瀬大橋より東へ達する町なり旧田畷の中へ町家を建しより田中町と号く今東西二町へ分る日く市あり柿蜜栫等の菓類殊へ多し蜜柿ハ本国の名産にして他へ比類なし詳に在田郡の條へ記す

熊野路一里塚 橋向町より南へ達する屋町とす町の南端へあり府下へ至る熊野へ至る道の始とし此塚ハ旧一里山町より おなじく彩冨町を築きて後こゝにうつす

本宮へ至る路程并驛所

若山 一里半 内原 二里 加茂谷 一里半 宮原 一里半 湯浅 一里

井関 二里 原谷 二里 小松原 三里 印南 三里 南部 二里

田邊 二里 三栖 二里十五丁 芝 二十四丁 高原 二里十一丁 近露 二十九丁

野中 四里 伏拜 一里 本宮 以上の驛路を中邊地といふ其中間田邊より分れて海濱の方へゆく

を大邊地といふ詳に田邊城下の條へ記す

紀伊國名所圖會後編卷一終

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』　請求記号 839-80
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『紀伊国名所図会』 請求記号 839-80

ガラス使用